

予防的回避によるケイパビリティの
制約と共同性の喪失

— 避難区域外原発事故被害の核心 —

成 元 哲

『中京大学現代社会学部紀要』 第12巻 第1号 抜刷

2018年9月 PP. 225~288

予防的回避によるケイパビリティの 制約と共同性の喪失

— 避難区域外原発事故被害の核心 —

成 元 哲

1 原発事故後の生活変化と健康影響

アメリカの社会学者エリクソン (K. Erikson) は、20 世紀の科学技術の粋を集めた原子力発電所で起きた事故を<新しい種類の災難>と呼んだ。彼はスリーマイル島原発事故の被害者を追跡調査した経験がある。そのため、放射能災害は被害者にとって終わりはないということを自覚していた。同様に、チェルノブイリ原発事故後の避難者の調査を続けているアメリカの心理学者ブロメット (E. Bromet) も、原発事故の特徴として、次の三つをあげている。一つめは、事故の影響が長期化すること。二つめに、精神健康面の影響が現われやすいこと。三つめとして、母親と原発作業員が最も脆弱な集団であるということ。

われわれ「福島子ども健康プロジェクト」は2013年から毎年1月に、福島県中通り9市町村（福島市、郡山市、二本松市、伊達市、本宮市、桑折町、国見町、大玉村、三春町）に在住する2008年度出生児（08年4月2日～09年4月1日生まれ）6191名全員とその母親（保護者）を対象に、「原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」を実施してきた。2012年10月～12月に、9市町村の住民基本台帳から対象者を抽出した。対象地域は避難指示区域外であり、中間指針で「自主的避難等対象区域」とされる。放射線量は避難指示区域より低いですが、局所的なホットスポットが存在

する。学校、住宅、道路など一通りの除染は済んだが、2018年3月現在、道路の側溝や雨樋を中心に追加の除染作業が続いている。

なぜこの地域を選んだか。それは避難区域に隣接し、健康影響の不確実性が高く、リスクへの対処が先鋭に問われる地域だからである。こうした地域特性のため、事故直後から、放射能リスクの受け止め方も、避難、外遊び、地元産食材の使用などについての対処の仕方も、多様である。また、避難指示区域から移住した避難者と以前から中通りの住民である人たちとの間で、あるいは避難区域外避難者への住宅支援打ち切りにおいては、自主避難者と中通りに滞在する住民との間で、補償や支援策をめぐる葛藤や分断が生じている。

まず、原発事故後、福島県中通りの親子の生活がどのように変化してきたのかについて確認しておこう。原発事故後の日常生活の変化については、2013年1月の第1回調査では12項目を「事故直後」「事故半年後」「この1カ月間」の3つの時期に分けて質問した。第2回調査以降は上記に加え、「放射能に関してどの情報が正しいかわからない」、「原発事故後、福島に住んでいることでいじめや差別を受けることに対して不安を感じる」の2項目を追加して14項目となった。ここでは、2013年1月から18年1月までの「7時点」の原発事故後、生活変化の傾向を〈表1〉に示す。親子の生活変化として、回答には大きく四つの特徴が認められる。なお、この結果は2018年3月末日時点の819名の子ども（保護者）の回答を集計したものである。

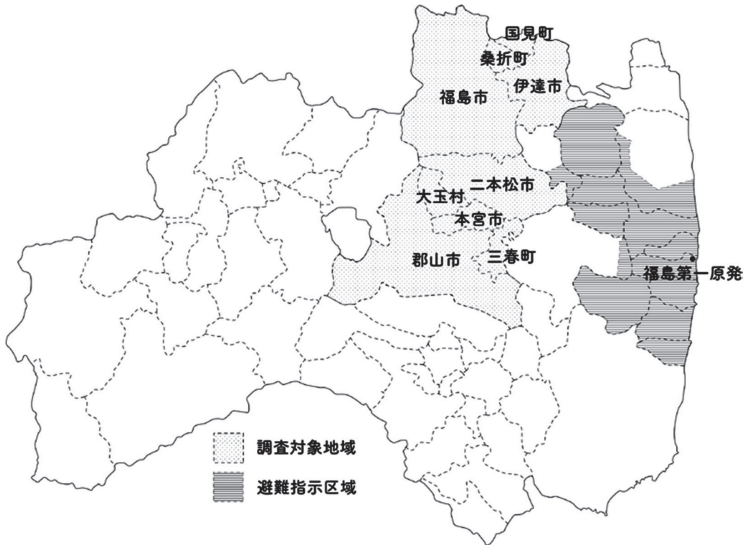


図 1 調査対象区域

一つめは、18年1月においてもなお半数以上の人々が「あてはまる」（「どちらかといえばあてはまる」を含む、以下同様）と回答している3項目である。それは「原発事故の補償をめぐって不公平感を覚える」、「放射能に関する情報不安」、「いじめや差別への不安」である。二つめは、ゆるやかな減少傾向にありながらも「4割程度の人」が「あてはまる」と回答している、次の4項目である。すなわち、「放射能の健康影響についての不安が大きい」、「原発事故後、何かと出費が増え、経済的負担を感じる」、「放射線量の低いところに保養に出かけたいと思う」、「福島で子どもを育てることに不安を感じる」である。三つめは、「あてはまる」人が原発事故直後は9割程度だが、2年後に急激に減少し、その後も減少し続けている、次の3項目である。「地元産の食材は使わない」、「洗濯物の外干しはしない」、「できることなら避難したいと思う」がある。四つめは、事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移している項目で、「放射能

への対処をめぐる配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」がある。

(%)

	事故直後	事故後半年	2年後(2013年)	3年後(2014年)	4年後(2015年)	5年後(2016年)	6年後(2017年)	7年後(2018年)
地元産の食材を使用しない	90.5	84.5	50.2	39.3	28.5	21.8	16.1	15.0
洗濯物の外干ししない	93.9	80.5	44.9	36.4	32.3	26.5	23.7	24.3
保養への意欲	91.5	89.0	74.8	66.0	55.1	44.5	39.4	40.4
避難願望	85.0	74.5	45.7	31.8	24.5	20.0	14.9	17.0
健康影響の不安	95.2	91.3	79.5	63.7	58.5	51.4	46.9	46.1
子育ての不安	92.9	87.3	71.8	60.3	50.7	42.8	37.4	34.7
親子関係が不安定	16.3	14.8	9.6	8.1	5.5	5.3	5.0	4.5
情報不安				75.4	69.6	63.7	57.9	60.8
配偶者との認識のずれ	32.8	28.2	18.8	21.1	17.2	16.2	14.0	15.3
両親との認識のずれ	35.3	31.1	24.5	25.8	20.7	20.4	19.1	18.6
周囲との認識のずれ	39.2	36.6	29.9	28.0	23.0	22.4	18.3	19.8
補償の不公平感	73.7	74.8	73.0	70.8	70.2	67.4	63.4	68.1
経済的負担	84.2	80.7	70.4	65.2	58.8	50.5	43.6	43.3
いじめや差別への不安				54.2	51.2	47.3	55.8	55.0

表 1 原発事故後の生活変化

以上の事実は、原発事故から7年以上が経過したものの、子どもをもつ母親の生活にはいまだ大きな影響が及んでいることを示している。そのうえで、時間の経過とともに、原発事故による影響を学歴、収入、職業など社会経済的地位に焦点をあて、ここでは5年間の変化を見てみると、次の

二つの特徴が見出された。

一つめは、「放射能の健康影響への不安」、「放射能への対処をめぐる認識のずれ」、「放射能に関してどの情報が正しいのかわからない(情報不安)」、主観的健康感においては、収入による格差が「拡大」している。要するに、「低収入層」(年収800万円以上の層と比べて400万円未満の層)では、「不安」や「認識のずれ」がなかなか解消しないということである。

二つめは、補償をめぐる不公平感は、学歴と収入による差が「維持」されている。特に、非大卒層で補償不公平感が解消していない。このように時間の経過とともに、生活への影響に関して社会経済的格差が「縮小」するところか、「維持」・「拡大」しつつある。

次に、精神健康の不良が持続する母親の層とそれに関連する要因について述べたい。「うつ」と「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」は、2013年ではいずれも25%程度であったが、2014年には「PTSD」は10%弱低下した一方で、「うつ」は3%弱の増加を見せた。2015年では、「うつ」と「PTSD」の割合に大きな変化は見られない。「うつ」が持続する層に関連する要因を確認すると、一つめは、夫婦・両親との間に放射能対処をめぐる認識のずれを感じている層、二つめは、経済的負担を感じている層、三つめは、ソーシャルサポートが少ない層である。

こうした結果から、福島原発事故から年月が経過し、子育て中の母親の精神健康は、適応している人と回復から取り残されてしまう人とに分かれる傾向を呈しているといえる。原発事故直後の混乱した状況から平穏を取り戻しつつある一方で、今なお、慢性的なストレスを抱える母親がいる。したがって、精神健康の格差に照準を合わせた支援策が必要である。

2 原発事故の被害構造と関連要因

福島原発事故のように、有害物質が広範囲に及び、集団被害に発展した事例では、特有の社会的要因が人々の不安やストレス、リスク対処行動、生活の質、心身の健康に大きな影響を及ぼす。そのため、これらの心理社

会的要因や社会経済的要因が被害の実態解明や支援策の検討にとってきわめて重要な意味を持っている。

結論を先取りすると、原発事故は放射能よりもっと大きな問題である。したがって、放射能だけでなく、不安や生活変化（リスク対処行動とそれによる生活の質の低下）など原発事故全体の影響を見ることが重要である。様々な要因の相互作用やそれらの複合体としてみないといけない。要するに、放射線量でもって直ちに被害が決まるわけではない。放射線量と心理社会的要因ならびに社会経済的要因が相互に関連してはじめて、具体的な被害が規定されるのである。不安や生活変化、生活の質の低下、それによる様々な健康影響の発生との関連を単純化して図式化すると、下記のようなになる（図2）。

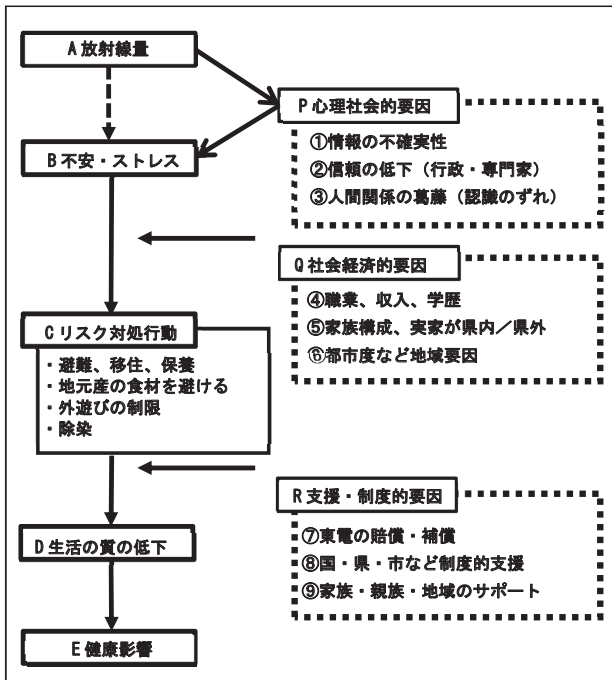


図2 原発事故の被害構造と関連要因

原発事故により、福島県中通り地域は、これまで暮らしてきた生活空間に放射能(A)が降り注いだ。このことが母子のこれまでの生活を大きく変え、母親は子どもの外遊びや食生活など日常生活において大きな不安(B)を抱えながら暮らしている。その際、放射線量が高いか低いかにいった点に加えて、放射能の健康影響をめぐる情報の不確実性(①)が母子にとって大きな不安要因となっている。その結果、将来、後悔しないために何か対策や行動をとりたいが、どの方法が正しいかわからない状況が事故当初から継続している。

情報内容の矛盾や情報発信主体に対する不信(②)は、過少・過剰な対処行動(C)の原因となり、これを解消するのは容易ではない。また、苦痛を伴う不安やストレスに加えて、諦めの感情をも生んでいる。夫婦、両親や親族との間に「放射能が安全かそうでないか」「避難すべきかそうでないか」「どのように子どもを守っていくか」等の認識のずれ(③)があり、人間関係に苦しむ声が多い。つまり、意見の対立による葛藤と摩擦が生じ、関係の破綻にいたるケースもある。

放射線に対する恐怖に心理社会的要因(P)が加わることによって、不安やストレス(B)が増幅されるが、こうした不安やストレスに対して、「避難・移住・保養」、「地元産の食材を避ける」、「子どもの外遊び制限」、「自ら行う除染」などのリスク対処行動(C)がとられる。リスク対処行動には、仕事(④)、経済的事情(④)、避難先候補としての実家が県外にあるか否か(⑤)、学齢期の年長きょうだいがいるかどうか(⑤)などの社会経済的要因(Q)が関連している。

リスク対処行動は社会経済的要因が大きく関わってくるので、リスク対処行動をとることによって経済的負担が生じ、生活の質が低下(D)することになる。その生活環境の悪化を防止する外的支援(R)として「国・県・市など制度的支援」(⑧)、「東電の賠償・補償」(⑦)、「家族・親族・地域のサポート」(⑨)が挙げられる。しかしながら、十分でない実情が浮き彫りにされている。社会保障への関心も高まっており、子どもの健康や経

済的な不安を社会保障の次元で取り組んでほしいという気持ちの表れであると考えられる。

これら様々な要因の結果、生活の質が低下し、それに起因する様々な健康影響（E）が発生している。子ども達に見られる健康影響には、「家族が離れ離れになることによる情緒不安定」「外遊びの制限による体力の低下・ストレス・体重増加」等の意見が多い。子どもの将来の健康への影響に対しては、継続的な検査による早期発見と予防が適切に実施されることが望まれる。

一方、母親への健康影響は、放射能汚染に起因する不安・ストレスが精神健康の低下にあらわれてきている。子どもの健康および差別への不安、人間関係から感じるストレス、経済的負担によって生じるフラストレーションを原因とする愁訴・体調不良などが指摘されている。

以上の結果から、避難区域に隣接する地域における原発事故の影響は依然深刻であり、原発事故の影響が慢性化していることがわかる。こうした意味で、今なお、終わらない被災の時間が続いていることを示している。

3 さまざまな場面に残される不安

それでは、具体的にどのような影響があると感じているのだろうか。調査票の最後のページには自由回答欄を設けている。そこには、福島県中通りで子育て中の母親たちの声がたくさん書き込まれている。そのなかで最も頻度が多いのが「不安」という言葉である。これは、放射能の健康影響への不安に加えて、生活不安、原発事故による人間関係への影響に対するものも含まれる。たとえば、結婚・就職時の差別や偏見を恐れる事態、または、余震などで原発が大丈夫かと心配する気持ち、原発の再稼動に際して感じる不安などである。

こうした回答の割合は、2013年の第1回調査から17年の第5回調査まで、自由回答欄の記入者全体のなかで一貫して6割を占めている。その内容で多いのは「健康」、「生活」、「人間関係」、「情報」に関する項目である。

第1回調査では「生活不安」が最も多く、第五回調査では「健康不安」が多い。全体的な傾向としては「生活」に関連する不安が年々減少する一方、「健康」に関する不安は持続的に多い。これを各年の不安の全件数に占める割合で示したものが(図3)である。

以下、これらの項目について詳細に見てみよう。

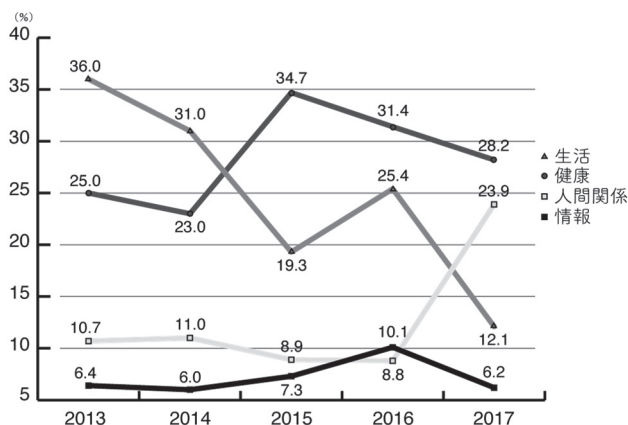


図3 自由回答欄における不安の内容別割合

3.1 健康不安

「健康」に関する不安は自由回答全体のなかで一貫して2～3割を占め、2015年からは最も多い。「健康」のなかでも最も多いのは、「子どもの将来の健康不安」である。たとえば、原発事故から5年後の16年1月調査には次のような声が寄せられている。

「10年後、20年後のことが、不安になってきています。子どもたちが、病気にならないでこのまま元気でいてくれることを願うばかりです」

また、ある母親は、将来、子どもの健康に影響が現われた時のために、それを補償できる制度を求めている。

「私自身ときどき子どもたちの将来の健康や県外に出たときの差別など

について不安になる時もありますが、いまではほとんど震災前と変わらない生活をしていると思います。10年後、20年後に体に影響が出た場合などの補償をきちんと行なってもらえるような制度ができると安心です」

その次に「現在の健康不安」、「体力低下による健康不安」、「出産」が続く。第1回と第2回に比べ、第3回調査以降、福島県民健康調査の甲状腺検査の結果が発表され、甲状腺ガンが報道されるなどした結果、「将来の健康不安」がさらに増加している。たとえば次のような声がある。

「子どもの甲状腺ガンのことが一番心配です。いつも『A2』（超音波検査により、20mm以下の嚢胞または5mm以下の結節が認められた状態）の判定なのですが、今後、どうなっていくのか。甲状腺ガンの子どもたちも見つかっているようなので、早く、原発事故との関係を調べてほしいです。子どもが小学校に昨年入学したので、元気に通ってくれることが、親にとつての安心につながっています」

また、あるお母さんは次のように不安を綴っている。

「正直なところ、原発事故のことはあまり話題にのぼらなくなりました。しかし、子どもたちは毎日積算線量計をつけて学校へ通っていますし、除染作業もそこらじゅうで行なわれています。ネットのニュースなどで、子どもの甲状腺ガンが増えたとか鼻血と放射性物質には関係があるとか見ると、また不安になったり気持ちがゆれたりすることもあります。去年ぐらいから知り合いや友人がガンになり、関連性はわかりませんが、あまりにも続くのでそのことも不安に思います」

3.2 生活不安

次に、「生活」に関連して多いのは、「外遊び」、「食べ物」、「住むこと（避難）」、「除染」に関する声である。第1回と第2回では放射能の不安から「外遊び」の制限を訴える声が多い。2013年1月の調査では次のような声が寄せられた。

「子どもは敏感です。原発事故前までは普通に外遊びをしていたのに、

事故が起きてから1カ月以上もの間、家から出ることのない生活でした。私の理解のなかで全ての情報を子どもに話し、外では遊べないことに対しても『ごめんね』と伝えました。それまで外で遊びたいと言っていた子どもも、今では『外は危ないから中に入ろう』と下の子にも言ってくれるようになりました。外遊びをしないことで、どれほどストレスがたまっているのか、このままでは心身の発達に影響があるのではないかと、ずい分悩みました。事故後、少し落ち着いてきてから、それまでの分を取り戻してあげたいと思い、県外に月に2～3回出かけ、外遊びをさせていました」

全体的な傾向としては「外遊び」、「食べ物」、「住むこと（避難）」に関する不安は年々減少傾向にある。だが、2016年調査では、今でも苦しんでいる福島県中通りの住人も原発事故の被害者であり、補償の対象とするよう求める声もある。

「少しでも線量が高いところに居させたくない気持ちから、学校での体育・外遊びもしばらく制限してきました。私自身とてもストレスになりました。三男は当時小さかったので、外で遊べなかったなどと思うことはないでしょうが、長男は当時3年生。『僕もみんなと外で遊びたかった』と少ししてから泣いて話したことがありました。親もつらい決断でしたが、子どもにもつらい我慢をさせてしまったと親も子も涙でした。子どもの心に何か影響を与えてしまったのか、私の決断が良かったのか……福島に住む人はそんな不安や悩みを抱えながら今でも暮らしています。まだ終わらないのです。郡山に住む私たちの家が原発事故の補償対象になることを望みます」

生活不安のうち「除染」に関しては、除染そのものの効果に対する不安が多い。

「五年たったというのに、庭にはまだ除染した土が埋まっているし、線量もずっと下がらない。除染は、終わったというが、全ての場所が安心とは言えず、それがこれから私たちにどのような影響を与えるのか不安である。しかし、いつまでも不安とばかり言うてはられないし、生活もして

いかなければならない。せめて、後悔しなくていように子どもたちと楽しい思い出をたくさん作りたいと思うが、毎日の生活に追われてしまうため、子どもたちだけでも行ける行事等をいろいろ計画してもらえるのは嬉しい」

3.3 人間関係不安

「人間関係」に関する不安は「いじめ・差別」と「周囲との認識のずれ」に大別できる。「いじめ・差別」の割合は、やや横ばいであったものが2017年1月の調査で急増し、自由回答全体で2割以上に達している。「原発いじめ」の報道により「人間関係」への不安が増幅している。一方、「周囲との認識のずれ」は少しずつ減少してきている。17年1月の調査では次のような声が多数寄せられた。

「6年経つといっても、原発問題がおさまることはなさそうなので、県外に引っ越すか、いまだに悩んでいます。しかし、子どもたちが学校の先生や友達から原発のことでいじめられているのをニュースで見ると、避難したからといって、安心して暮らせるわけでもなさそうで、悩みはつきません」

「最近ニュースでもとりあげられている『原発避難者』の子どもたちに対するイジメについて、とても悲しく思います。特に小学生の場合は、原発や避難者について自分の考えだけで差別したりすることはなく、大人の話していることを聞いて差別をしたり、イジメたりしていたのではと考えています。子どもたちが大きくなって進学、就職、結婚などで福島を離れることになった時を考えると、ものすごく不安です」

また、「周囲との認識のずれ」に関しては、13年の第1回調査から下記のような意見が続いている。

「放射能のことを話題にする人が周りにおらず、その話はタブーとされているかのようです。そのことで何か言えば、変わった人あつかいでしょ。周りに避難した人が少ないので余計にでしょうか。時がたつにつれ、

放射能に対する意識がうすれてきているのではないのでしょうか。このくらいの数値なら大丈夫と言われても、通常値の二〜三倍で何が大丈夫だというのでしょうか。避難できるのであれば、今すぐにでもしたいというのが素直な気持ちです。以前夫と、避難するしないでけんかになりました」

「放射能に対する考え方の差が大きすぎて、不安を口に出すことがなかなかできなくなってしまいました。国がもっとこの事態を重く見て、未来ある子どもたちへもっと目を向けて動いてほしい。福島の人たちを実験マウスにしないで」

3.4 情報不安

「情報」に関するものでは、当局や東京電力などが「情報を隠しているのではないか」、「どの情報を信じたらよいかわからない」、「情報が信じられない」という不安が多く、特に第1回と第4回で顕著である。たとえば次のような声がある。

「原発事故が起き、放射能問題で色々な悩みや不安なことはたくさんあります。放射能に対して、今までにないことなので、何を信じればいいのか、正直わかりません。食べ物や、外遊び、判断するのは、親の私。この先、子どもたちの体は大丈夫か？ 子どもたちの子どもは、本当に大丈夫か？」

同時に、事故の風化を不安に思う声は年々増加傾向にある。17年1月の調査では次のような声が寄せられている。

「震災直後の状況から比べると、日常生活は震災前の時と変わらないくらいにはなりましたが、被災した私たちがさえ当時の大変な時を忘れかけています。このまま風化してしまうのではと心配しています。大人の私たちはいいのですが、子どもたちの将来を考えると不安な思いがあります」

「だんだん原発事故が風化してきている気がします。福島で生活せざるを得ない私たちからすれば、このままうやむやにされてしまうのではという不安を感じます」

このように、健康不安のみならず、子どもの外遊びや食べ物、避難、保養、除染など住まいの環境に至るまで、生活の全般にかかわる不安が訴えられている。さらに、人間関係や情報に関する具体的な不安も表明されており、これらが、原発事故によって引き起こされた被害の全体像を形作っている。その内容は、支援策を検討する準拠点となる。

4 予防的回避によるケイパビリティの制約と共同性の喪失

われわれが、原発事故による被害というとき、その被害のどのような側面に着目し、何を根拠にそれを被害と見なすか、また、それについてどんな救済が必要かについて自明とはいえないだろう。原発事故直後、物的損害や身体的被害が見えにくいなか、「見えない被害」という言葉が流布していた。現段階でわれわれは、原発事故被害とは何かという問いに答える言葉も制度も見出していない。ここでは、予防的回避によるケイパビリティの制約・剥奪と共同性の喪失という考え方で、これについて一つの答えを提示してみたい。

「予防的回避」とは、日常生活のなかで専門家ではない普通の行為者が、将来の損害の可能性、すなわち将来の望ましくない結果を避けるための決定を指している。「予防的回避」という概念にとって決定的に重要なのは、偶発的な損害それ自体が偶発的に、つまり、回避可能なものとしてもたらされることである。この場合にもまた、リスクを甘受しつつ決定が下されるべきか否かについて、それぞれ異なった見解をもった多様な観察者のパースペクティブが想定されうる。二つの時間的な偶発性状況、すなわち、(決定という)出来事と(その出来事のもたらす)損害とが、偶発性としてタイトにカップリングされているという事実からしてすでに、諸観察者の見解が分岐していく可能性は避けられない。時間的な偶発性は、社会的な偶発性を引き起こし、しかもこのような(観察者のパースペクティブの相違という)多元性も、何らかの一つの存在定式へと止揚したりできない(ルーマン 2014:32-33、参照)。

ケイパビリティは、人が自らの幸福を実現する自由度（幸せな生活を構成する諸機能の選択可能集合）とその幅を意味する。アマルティア・センの研究の中でもっとも有名な概念がケイパビリティである。ケイパビリティとは「人が善い生活や善い人生を生きるために、どのような状態にありたいのか、そしてどのような行動をとりたいのかを結びつけることから生じる機能の集合」、すなわち、「行為の選択可能性」である。具体的には、「よい栄養状態にあること」、「健康な状態を保つこと」から「幸せであること」「自分を誇りに思うこと」「教育を受けている」「早死しない」「社会生活に参加できること」など幅広い概念である。そして「人前で恥ずかしがらずに話ができること」「愛する人のそばにいられること」もケイパビリティの機能に含めることができるとしている

予防的回避が問題となるのは、将来生じしうる事柄は現在下される決定に依存し、しかもこの決定がなかったら損害に至ることもないであろうとされる場合に限られる。することも／しないことも可能である「現在の決定」によって、「将来の損害」の可能性が生じるのである。

原発事故直後、枝野幸男官房長官は、放射線量について「直ちに人体や健康に影響を与える数値ではない」という言葉を繰り返していた。この言葉は本質を突いたものであったが、半分の事実だけを語った。つまり、短期的には影響がないかもしれないが、中長期的には備えなさい、予防せよ！という、もう半分の事実を語っていなかった。生活者が日常生活場面で、将来の影響に備えることを余儀なくされた。これに伴い、生活が大きく変化し、人が自ら価値を認める生き方をすることができる自由、すなわち、ケイパビリティが制約されたり剥奪されたりした。また、人間の帰属集団とアイデンティティを根源的ところで支える他者との関係、人間関係の不和・葛藤に代表される共同性が喪失した。

「直ちに健康に影響はない」と原発事故の被害が「見えない被害」として、身体的ダメージや物的損害が見受けられないと、精神的苦痛や不安の問題とされてしまうが、これが違うのではないか。公害では、健康被害が生じ

た後に生活障害が生じるが、原発事故では生活障害が生じた後に健康被害が生じるのである。つまり、原発事故では、放射能への健康不安が募り、放射能を避けるために予防的回避行動を行うことによって生活の質が低下し、その結果、健康影響が生じるのである。それを私は、「予防的回避によるケイパビリティの制約・剥奪と共同性の喪失」と呼びたい。これが、原発事故被害の核心である。こうした原発事故被害はいつ終わるか予想がつかない。原発事故被害は決して避難だけに限られない。避難は予防的回避のための一つの行動に過ぎない。食、子育て、生活、生業、社会参加など生活全般において予防的回避が発生し、これによりケイパビリティに制約が生じ、家庭生活や地域社会において分断が生じている。そこで、ここでは、「予防的回避によるケイパビリティの制約・剥奪と共同性の喪失」として下記の五つに分類する。

- ①予防的回避による不自由 (reaction to radiation risks) 将来の健康影響など
- ②差別・偏見 (social stigma)
- ③家族との葛藤 (family conflict)
- ④地域社会における不和 (discord within community and society)
- ⑤生業 (仕事) 上の影響

上記の五つの分類をもとに、自由回答欄から読み取ることができた予防的回避による不自由と共同性喪失を表2に示した。「I 予防的回避による不自由 (reaction to radiation risks)」は、A～Iの9つの項目に分類でき、「A 生活拠点」を要因とする不自由は、避難によって家族が離れ離れになることの悲しみや苦勞、避難による身体的、精神的、経済的な影響、居住地選択の制約などが生じている。「B 食生活の支障」は、福島県産の食べものを避けることによる経済的な負担、自家製の農作物を収穫できない/食することができないストレスと経済的損失、食を通じた自然体験の制限などが発生している。「C 子どもの外遊び」の制約による不

自由は、放射能の影響を恐れ、外遊びを制限することにより、子どもの体力・運動機能への影響、子どもの言動や発達への影響などが生じている。「D 保養」は、保養へ行くことによる負担や苦勞、保養をめぐる周囲との意識のずれなどが重圧としてのしかかる。「E 除染」による不自由は、除染作業への不信感、一部の除染作業員による治安悪化の不安などが発生しており、除染の効果にも疑問が生じている。「F 甲状腺検査・線量測定」による不自由は、検査を受けることの負担感、その結果への不安、周囲との意識のずれなどがある。「G 妊娠・出産」は、福島での子育てをすることの不安を理由に、出産を断念せざるを得なかったという声も寄せられている。「H 経済的追加負担」は、放射能を避ける生活を送るための金銭的負担が通常の生活に上乘せする形で発生している。「I 健康不安」は予防的回避による不自由と共同性喪失の最大の要因として注目されるだろう。子どもが成人し、結婚出産するまで続く不安と精神的なストレス、母親自らの子育てや予防的回避の判断が良かったのかどうかの疑問や後悔の念などが発生している。

予防的回避によるケイパビリティの制約と共同性の喪失において、「II 差別・偏見 (social stigma)」は最も広範で長期的な取り組みが必要とされるものである。「J 烙印・風評」では、福島出身であることによる将来の差別への不安、または、福島に対する偏見、あるいは、現に福島在住であることで差別を受けた経験があるといった内容である。

「III 家族との葛藤 (family conflict)」は、K～Lの2つの要因に分類され、「K 人間関係 (親子)」を中心とする不自由は、子どもの外遊びを制限することによって生じる親の苦勞、親子間の葛藤やストレスであり、「L 人間関係 (夫婦・その他家族)」は、避難や食をめぐる意識のずれや心の葛藤、家庭内の温度差、夫婦関係の破綻などに至った経験が語られている。

「IV 地域社会における不和 (discord within community and society)」は、M～Nの2つの要因に分類され、「M 人間関係 (近所・知人)」は、

自主避難した人、避難しない人、避難指示区域から避難してきた人との間の付き合いの苦労や不満、子ども同士の関係への影響などが指摘されている。「N 賠償・補償」は、賠償金の差や避難者への補償をめぐり、避難者に対する不満・不公平感・不快感が示され、その結果、地域コミュニティが分断している事態に至っている。

「V 生業（仕事）上」の影響は、原発事故によって職を失う、風評被害により野菜が売れなくなるなど、仕事や収入への影響である。

I 予防的回避による不自由 (reaction to radiation risks)	A 生活拠点	1	家族離散の悲しみ
		2	家族のサポートの欠如による負担
		3	避難による経済的、身体的、精神的影響
		4	福島にはもう戻らない
		5	避難中だが迷いがある
		6	周囲からの批判・無理解
		7	避難先でなじめない
		8	避難先で窮屈な思いをしている
		9	避難先の親族の苦労
		10	居住地選択の制約
	B 食生活への支障	11	経済的追加負担
		12	怖さ・ストレスを感じる
		13	畑の作物が食べられない
		14	山菜等が採れない
		15	食の体験学習への影響
	C 子どもの外遊び	16	体力・運動機能・肥満への影響
		17	成長に必要な自然体験ができない
		18	外遊びさせられない精神的影響
		19	友達とのふれあいができない
		20	子どもの言動への影響
		21	外遊びをしなくなった
		22	室内遊び場への懸念・要望

I 予防的回避による不自由 (reaction to radiation risks)	C 子どもの外遊び	23	子どもに外遊びの代わりにさせてあげるのが大変
		24	身体的影響がある
		25	外遊びができないことの悩み
		26	子どもや周囲との意見の相違
		27	外遊びを制限したことへの後悔
		28	外遊びできるようになったが喜べない
	D 保養	29	保養に行くが悩むことが多い
		30	保養をめぐり周囲とずれがある
		31	「保養」という言葉が嫌い
	E 除染	32	作業員に対して不安がある
		33	除染土の置き場が不満
		34	除染作業に不満
		35	除染に費用がかかった
		36	除染しても変わらない、もとは戻らない
	F ・甲状腺検査 ・線量測定	37	原発事故のせいで検査をし続けなくてはならなくなった
		38	検査が負担
		39	検査結果がこわい
		40	周囲とのずれ
	G 妊娠・出産	41	出産をあきらめた
		42	計画が狂った
		43	中絶をした
	H 追加的 経済的 負担	44	放射能対応での金銭的負担
	I 健康不安	45	不安が将来も続く
		46	悩みながら生活している・精神的なストレスがある
		47	自分の判断に後悔している・後悔するかもしれない
		48	子ども以外の家族の健康
		49	現在は普通であるが将来を考えると不安
		50	甲状腺検査の結果、子どもの将来の健康に不安
51		次世代への不安	
52		検査をしても不安である	

I 子防的回避による不自由 (reaction to radiation risks)	I 健康不安	53	外遊びさせてもいいのか悩む
		54	考えないようにすることがある
		55	あきらめの気持ちがある
		56	何かあると放射能の影響を疑う
		57	事故前に戻りたい
		58	何かあっても国は因果関係を認めないのでは
II 差別・偏見 (social stigma)	J 烙印・風評	59	将来の差別への不安
		60	福島に対する偏見
		61	実際に差別があった
		62	いじめのニュースから
		63	福島出身であることへの引け目
		64	県外へ行くことへのためらい
		65	賠償金をもらっていると思われる
III 家族との葛藤 (family conflict)	K 人間関係 (親子)	66	制限することがつらい
		67	子どもがストレスを感じている
		68	子どもの言葉に胸が痛む
		69	親も子どもがストレスを感じている
		70	すぐ子どもを叱ってしまう
		71	イライラして子どもにあたってしまう
		72	子どもへの説明に困る
		73	なぜ制限されるのか、子どもは理解できない
		74	子どもに注意できないストレス
		75	姉妹ゲンカが多くなった
		76	運動が苦手になってしまって、申し訳ない
		77	子どもが言うことを聞かなくなった
		78	子どもが外遊びをしなくなってしまい、それを見ると心配、イライラする
		79	子どもが外遊びをしているとイライラしてしまう
		L 人間関係 (夫婦その他家族)	
81	放射能についての家族と意識のずれがあり辛い		
82	避難を巡り、配偶者との意見のずれがある		
83	避難中だが、家族の理解を得られず悩んでいる		
84	家庭内でも温度差があり、避難できない		
85	避難中の親戚が頻繁に泊まりにくるので迷惑		
86	考え方の違いで夫婦関係の破綻		

Ⅲ 家族との葛藤 (family conflict)	L 人間関係 (夫婦・その他家族)	87	母子避難で、夫との関係が悪化
		88	母子避難で夫と意見の相違もあり相談しにくい
		89	家族から、避難しないことを責められて辛い
		90	避難しないことを親戚に責められ、配偶者とも意見のずれがある
		91	避難したことを家族に非難され傷ついた
		92	意識の違いがあるが、家族の気持ちを考えると何もいえない
		93	事故を巡る様々な行動で、身内との関係が変わった
		94	親に理解してもらえず、相談しにくい
		95	食を巡る意見の違いから、家庭内の空気が悪くなった
		96	親との考え方の違いによるストレスがあり、子どもにも辛い思いをさせている
		97	家族内でも温度差があり、話ができない
Ⅳ 地域社会における不和 (discord within community and society)	M 人間関係 (近所・知人)	100	温度差があり話題にしづらい
		101	避難区域の人との付き合いが難しい
		102	転居先でつらい思いをした
		103	自主避難して戻ってきた人との接し方に悩む
		104	避難中だが周りの目が気になり不満を言えない
		105	不満を言う人と一緒にいると嫌な気持ちになる
		106	避難した人に対する劣等感
		107	子ども同士の関係への影響
		108	隣人が避難してしまいさみしい
		109	避難先では孤独な思いをし、福島に戻ると近所の人に非難された
	110	職場の無理解	
	N 賠償・補償	111	避難者に対する不満・不公平感・不快感
		112	避難者の言動・金銭感覚
		113	避難者たちも税金や医療費を払ってほしい
		114	避難してきた人と地元民の亀裂
		115	コミュニティの分断
V 上の影響 (仕事)		116	仕事、収入に影響

表 2 予防的回避による不自由・共同性喪失リスト

表2に示した予防的回避による不自由・共同性喪失を表している代表的な自由回答の記述の一部を表3に示す。左3列は表2の分類記号を表し、各記述の末尾の数字は、調査年と、それぞれの年に到着順に付した調査票の整理番号である。

			自由記述 (抜粋)
I	A	1	原発後から、家族とはなればなれで、母子世帯です。たまに地元へ帰省したりしましたが、私自身、精神的にまいっています。子供のため…と思い避難していましたが、子供の心の方が最近不安定になってきており、いままでガマンしていた事、本当はとてもさみしく家族と一緒に暮らす事をのぞんでいるようです。放射能から身体を守るのか、はなれていて心をきずつけているのか、もう、何をどうすれば子供にとって一番よいのかわかりません。(2013-787)
I	A	1	家族がバラバラに避難をし(夫は仕事の為、福島に私と子供は実家のある神奈川に)当時2才だった子供は毎日父親の写メを見ていましたが、数週間経った頃、夜中に泣き叫び私をたたき始めました。聞く事も我慢していたのだと思います。また、思う事もうまく伝えられなかったのでは？(2013-974)
I	A	1	原発事故後、主人と離れて暮らす様になり、長男がさみしさを感じています。福島へ戻ることは、子供の健康に影響を与える可能性があるので、今は、避難先で暮らすことがいいとは感じていますが、主人と離れて暮らすさざるを得ないのは、原発事故がもたらした悲劇なのです。補償うち切りになり、生活も前に比べると大変になって来ています。福島には高齢の義母もおり、二重生活は厳しいです。(2014-486)
I	A	1	去年は子供が不安定になる事が多く、「どうしてじいとばあと一緒に住めないの?」「福島に帰ろう」などと言って大声でわめいたり、あばれて手がつけれなくなってしまったので、実家に帰る回数を増やしたりしました。(中略)私も、子供をむかえに行くときは、子供が「イヤだ、アパートに帰りたくない」と泣くので、自分の行動がまちがっているのか?とても悪い事をしている気分で一緒に泣いて帰る事がほとんどでした。実家からアパートまで一度も泣きやまなかった事も何度もありました。(約2時間半ぐらいです)。やさしく声をかけて「放射能の影響で将来○○くんが病気になっちゃうのが一番心配だから、今はガマンして少しでも線量の低い所に住んでるんだよ」と言いかけながら帰る事もあれば、私も不安定になって泣いている子供を強く叱ってしまう事もありました。(2015-730)

I	A	2 8才、5才、4才の子供がいて将来先がみえない健康の不安もあり、後悔したくない気持ちで私も夫を残し、1人の友達を頼りに遠く県外へ子供3人をつれて避難をしました。周囲の方々には本当によくしていただき、お世話になりました。しかし、8才の子供が高熱をだし、一人で知らない所で泊まったこともないのに大学病院に入院した日のことが忘れられません。下の子供たちを見てくれる親戚もいないので、8才の子供を病院に1人残し、辛くて一番一緒にいてあげたい時にいてあげられなかったことを思い出すと、今でも涙がでできます。夜中もナースコールを何度もおし「ママ、ママ」と…本当にかわいそうなことをしてしまったと思っています。(2013-1636)
I	A	2 小学校入学という人生の門出が、いまだ確実に安全だという明確な答えもなく避難生活を続けざるを得ない状況であるため、家族みんなで祝うことも出来ずに、母一人、子一人だけでのものとなってしまいうことがやりきれないさみしい気持ちになります。具合が悪くなった時に、子供を預けるところがないため、本当に困っています。定期的な悩みや困りごとを話せる専門のカウンセラーの方がいてくれば、いろいろと話せ、ストレスも減るのにと希望しています。経済的に苦しいため、食費を削るしかないなどギリギリの生活をしています。(二重生活なので負担が倍になっている) 将来の目標や予定を決定できずにいます。(安心できず、不安になります)(住む場所も含む)(いつまで住んでいられるのかなど)本当に心から楽しいと思えることが正直ありません。毎日をただ淡々と送っている感じです。(2015-1006)
I	A	2 ・主人から。福島→寒河江にくる時間がムダ・たまに福島へ帰るが、近所の人に会いにくい・今、生後2ヶ月の子供がいます。なかなか、夫がふだんいないので、上の子(小1)と下の子の世話で大変。すぐたよれる人(みてほしいときにみてもらえない)がいないので、つらいところです。福島に帰ればいいのですが、かえりたくはないです。(2016-765)
I	A	3 窓も開けず、換気扇も回さず、外出も制限する生活を1ヵ月以上していました。息苦しさを感、子供達がかわいそうで、会津若松市への避難を決めました。現在も避難生活中です。避難してすぐは、数ヵ月で戻れるだろうと、福島市の賃貸アパートはそのままに、会津若松市のアパートとの二重家賃をしばらく続けました。生活が苦しくなり福島市のアパートは、引き渡しました。夫は、職場が郡山市なので、毎日1時間以上かけて、通勤しています。すべては、家族が一緒にいるためです。夫は、通勤が大変になり、体調をくずし、現在静養中です。子供達は、会津に避難してすぐ、体調をくずすことが多く、しょっちゅう受診していました。放射線の影響なのか、環境が変わったことによるものなのか、わかりませんが、私達家族にとって、原発事故は、身体的にも心的にも金銭的に大きな影響をもたらしました。悲しいの一言です!! (2013-2614)

I	A	3	我が家は後から来た夫が、うつ病になりました。女性の移動は比較的にスムーズに行っても男性の転居は本当に大変だと感じます。今、結局夫は福島に戻り、職も失い、我が家は私の収入のみとなっています。原発事故は、本当に家族を壊してしまう。(2014-989)
I	A	3	家計的にはゆとりはないが家族4人暮らしていける今の状態だが、貯金を使うしかなかった過去5年だったので、ギリギリの生活で、ここから移動しなくてはならない今、(避難中で2017年3月で住居打ち切りが決定)引っ越し費用も大きいので難しい状況です。もう少し時間の猶予が欲しい。避難区域でないと、自費でやらなければならないので苦しい。(2016-4)
I	A	4	自主避難のため、郡山の自宅を売却し、仙台市に新築しました。実家が郡山でたまに訪れるため、元の家を見るのは複雑な心境です。仙台市に住んでいるのは、とても気が楽ですが、主人は、須賀川市まで通勤しているので、大変のようです。原発により、生活が一変しましたが、東京電力さんの電話での対応は、誠意のないものでいきどおりを感じます。(2015-93)
I	A	4	あの地を離れてしまったことに負い目を感じます。これは一生忘れない、消えない思いなんだと感じています。(2016-594)
I	A	4	借上げ住宅も終了するので、個人契約へ切り替え手続きをしています。が今後やっていけるか不安です。でも地元へ帰るにはもう友人との心はなれてしまっているし、また1から生活をやり直すのも子供に負担がかかると思うと、ここでごんばれるしかないのかなと思います。(2017-603)
I	A	5	生まれ育った地を離れて、新しい生活を送っていること、いまだに正しいことなのかどうか分からずいます。子ども達は、私が生まれ育った地(子ども達が生まれた地)で生活していた年月よりも、この新しい土地での生活の方が長くなりました。子ども達にとっては、この地が故郷になっているのかと思うと複雑な気持ちです。両親も年老いてきました。心の整理はまだまだつきそうにもありません。一生葛藤しながら送るのだと思います。(2016-844)
I	A	5	転居して4年経過しました。子供達は、それぞれ環境に馴染み、今や福島県に居た事は覚えていないようです。子育ての環境、温暖な環境そして一番大切な教育の環境も整っている今の生活は子供にとっては申し分ありません。しかし、私の故郷はやはり実父母が居る東北であり、いつかは必ず戻りたいと思っています。未だ戻るに戻れない状況に、ふとした時に「なぜここに居るのか?」と悲観的になる事があります。故郷のニュースを観る度に望郷の念にかられます。(2017-93)

I	A	5	<p>私達は、福島県から母子避難で、自分の実家にお世話になっています。でも、もうすぐ6年…そんなにお世話になるつもりはありませんでした。子供達も、こちらの生活に慣れ福島には帰りたくないと話しています。主人は、福島で生活しているので、私達が実家を出て二重生活をするのも、難しく…。いつまでも実家に世話になっているわけにもいかず…。どうしたらいいのか、毎日考える生活に疲れます。子供を強制的に連れて帰るのも、考えますが、連れて帰って学校行けなくなったり、イジメも心配です。(2017-813)</p>
I	A	6	<p>震災直後に県外(西日本)の実家へ母子だけで避難しました。子供への影響をはじめに心配し快く送り出してくれた夫や、職場には感謝しています。その一方で「行くアテのある人はいいよね」「あその家は避難して大げさ」等言われた事もあり、反論もできず悔しい思いもしました。(2013-1515)</p>
I	A	6	<p>原発事故から時間が経てば経つほど(そんなに経っていない現在でも)汚染されている土地で普通に暮らすこと、生活することがあたりまえな雰囲気になっていて、自主避難しているという状況もなかなか理解されづらい。時間が経てば経つほど、もっと理解されなくなるのではないか。いずれ戻ってきて生活するにも不安。避難し続けるのも、経済的にも、家族が別れて暮らしている状況が精神的にも大変。でも子どもの健康のためにはできる限りしたいと考えている。しかし、いつまで続けられるか…。このようなことをグルグルといつも考えています。(2013-1750)</p>
I	A	6	<p>娘が今年小学校へ入学します。悩みましたが、戻らないことにしました。福島に帰省するたびに子供がかわいそうと責められ旦那をないがしろにしていると言われ…子供にも影響が出て情諸学級を教育委員会からも学校からもすすめられました。それから個人的に専門の病院に行きましたが、普通学級に行きなさいと言われ…毎日胃が痛い状況でした。今もこれからのことを考えると涙が出てきます。(2015-629)</p>
I	A	7	<p>11年秋に、実家の理解と助けもあり、仙台に(実家に)避難しました。小4、小1の息子たちを転校させ、3年間の避難の予定でした。しかし、長男が学校でひどいじめにあい、何とか助けを求めましたが、学校側は遊びとして対処してもらえず、そのうちに息子が心身症になってしまいました。本人は何とかそのまま耐えようとしたのですが、病気を期に福島に戻ることにして、今現在は市内に生活しています。(2013-1721)</p>
I	A	7	<p>震災、原発事故で、2年間山形(米沢)に避難して一昨年の12月に、以前居住していた所とは別の隣町に、持ち家を購入して引越しましたが、長女が思春期の初期に転校したため学校に未だになじめず、もう少して中学生ですが、あまり希望も持てず、以前の所に戻りたいと(山形)、未だに言います。友人関係や、地域になじめずにいます。やはり、原発事故さえなければ、こんな思いをする事がなかったのにと、心のどこかで、思ってしまう事があります。地元を離れなければ、わからなかった事、わかった事、色んな事がありました。(2015-1149)</p>

I	A	7	避難先から帰還して3年目になります。長女が転校して来て、周囲となじめず、苦い経験もしました。今でも、震災がなければと思う事もありますが…、取り返しがつかないので、とにかく前を向くしかありませんが、仕事も小学校で特別支援介助員として、なんとか頑張ってる途中なので、うまく両立させて、頑張りたいと思います。(2016-144)
I	A	8	福島の家が持ち家だったため、歌を歌ったり、家の中を走り回ったりと子供達がのびのびと普通にしていた事が今は2Fに大家さんが住んでいるため苦情を言われたりして…。子供達にちょっと窮屈な思いをさせています。「福島の家は広くてよかったなあ」と言われるとちょっと悲しく、原発事故をうらんだりします。今でも子供(2年生8才)にとって福島の家はボクの自慢の家だと話してくれます。うれしさとかなしさがまざって複雑です。(2014-806)
I	A	8	原発事故後、素人の母親は子どもを守るため、情報を必死に集め、自己責任で行動を選択することを強いられた。ひっこしもし、家族の形も変わり、結果、母子2人で実家に戻り、現在に至る。実家には、息子の部屋はない。母子2人でのんびりすずす、空間(部屋)がない、いつも老夫婦(祖父母)のみるテレビが無駄につけられた茶の間で横になることもできず、気がつかう毎日。食事の好みも生活時間(リズム)もちがう2家族がムリやり同居することは、いくら血のつながりはあるとはいえども、実家とはいえども、せまい空間に多くの人々が寄せ合って暮らした仮設暮らしと似ている。子どももストレスから落ちつきがなくなり、言動が粗暴になってきたことが、心配。でもガマンしながら窮屈な思いをしながらこの家に住みつけることしか今現在の選択のしようがない厳しい現実。それだけが原因ではないことは百も承知で、だれかのせいにしただけなのはわかっているが、それでもまだ「原発事故さえなければ」と思ってしまう自分がある。ささやかな日常の中にあった輝いていた幸せがなつかしい。(2016-914)
I	A	9	子供を他県の親の所へ避難させたが、私たちとは仕事で1ヵ月以上離れていた。しかし、子どもに虫歯ができてしまい、(今までは一本もなかったのに)奥歯が抜けてしまった。中学校くらいまではえてこないとのこと。歯ならびにも影響すると医者から言われた。親の負担も大きく、母が帯状疱疹になり、めまいで立てなくなってしまった。そういった部分の責任もとってほしい。(2013-2202)
I	A	10	事故以前は、私の実家がある福島市内に家を持ちたいと考え、土地も探していました。しかし、事故後は私以上に主人の方が子どもについて非常に心配しています。その為、会津若松市内に土地を購入し長男が小学校に入学するまでの、この1～2年の間に転居する予定です。親せき、友人もない、雪国の会津への移住は正直なところ不安が大きいです。会津に住むなんて、考えてもみなかったことですから。まわりでも、福島を離れる人は少なくありません。原発事故さえなければ…と考えずにはられません。子どもたちは、屋外での遊びはほとんどなくなりましたし、私自身、散歩等の運動も減り、どんどん体力、筋力が落ちていくことに不安を覚えています。将来、わたしたちは、子供たちは健康で笑って生活することができるのでしょうか。(2013-2139)

I	A	10	昨年、我が家も家建て、実家の両親、兄弟家族など泊まれるようにと、2階に和室を作るなど、うちに集まれるように考えて建てました。駐車場も、そんなに広くなくて良いのに、がんばって、6台はとめられるようにしました。その分、お金はかかりましたがそうするしかなかった…実家に集まる事が出来たら…実家を、かえしてほしい!! 私の、すてきなふるさとをかえしてほしい!! 緑をかえしてほしい!! (2015-218)
I	A	10	子どもも、大きくなってきたので、家を建てたいと思っているが、土地はない、土地代が高いので、建てたくても、建てられない状況です。(原発周辺の被災者が買い占めているため。)そんなことも取り上げられず、賠償されないで、家計は苦しくなり、自由に決めることも狭まっています。(2015-956)
I	A	10	いまま父親は郡山にいて子供達と私は県外にいる状況です。放射能の不安より子供達が転校するのがだんだん難しくなっている状況です。今の福島がもっと良くなることを望みます。原発前の福島にもどしてほしいです。原発事故がおきて人生がかわってしまったと思います。(2015-450)
I	B	11	食生活では、安全とは言われても、あれば、高い値段でも、他県の商品を買い求め、水(飲料水)は、いつも買い求めている。うちのような、母子家庭で、収入の少ない家庭では、大きな問題です。でも、子どもの健康を考えると、買わざるをえないし、やはり、将来がとて心配。もし、病気になったときに、後悔したくない…。あの時、ちゃんとしていればと…。(2013-7)
I	B	11	子供達の水を買う家庭がほとんどです。福島の水は、以前とてもおいしかったのに今は、スーパーやクリクラ(例)などの水で生活をしています。年間186,000円が水代に消えます。(2014-218)
I	B	11	私は、原発の爆発があってから福島県産の物は買えなくなりました。いくら数値を計っていても不安は消せないのです。今でも県産の物の方が野菜や果物は安いです。買いたいけど、買えないんです。「計っている方が安心」「もう気にしていない」そういう声が多くある中、私みたいな考えの人ももちろんいます。(2014-838)
I	B	11	野菜なども、地元のもは、今もほとんど食べていませんが、以前は、自宅の畑で作っていたものを食べていたので、金銭的にも負担があります。自宅の畑で作った物はもう一生食べないと思います。(2015-532)
I	B	12	できる限りのことはやろうと水道水は飲まない、食材は県外の物を食べる、手洗いうがいの徹底などやってきました。それもかなりのストレスでした。(2013-1491)
I	B	12	スーパーで売られている物はほとんどが野菜は東日本産、魚は太平洋側産と避けたい食材ばかり、買い物にストレスに、流通している食材も実は危険と知り、とても怖い。(2014-1073)
I	B	12	地産地消を進めてくるけれど、心配で手が出せません。けれど、その横に置いてある他県産は値段が1.5倍で…新鮮な野菜をたくさん食べるべきか、安全な野菜を少量食べるか。本当にストレスです。(2014-1060)

I	B	13	おじいちゃんの好きな家庭菜園、前は喜んでトマトやじゃが芋を食べていた子ども達。一昨年は作っても食べるのは祖父だけでした。またおいしく何の影響もなく作って食べれるようになってほしい。(2013-1469)
I	B	13	私は畑もやっていたので、野菜など食べれない土になってしまい泣きました。(2015-220)
I	B	13	畑で食物がどのようにして、育つのかなど子供に教えられたのに、子供はじゃがいもが土の中で育って大きくなっている事など、たぶん何も知らずに食べていると思います。野菜なんて、買わなくても実家から沢山頂いて、困る事などなかったのに、今では全ての野菜を買わなくては行けない。今は苦にならなくなってしまったが、震災後は、すごくお金がもったいないと思っていました。(2015-218)
I	B	14	毎年春になると考えずにはいられません。家のまわりには山菜が次々と芽を出し、すくすくと伸びて来て、以前は勝手口のサンダルをはいて、たらの芽やたけのこ、よもぎ、ふきのとう、こしあぶら等々、献立に取り入れるため摘んで来たものです。種類は一年を通して何十種類もあるのです。商売にしているわけでもないので、何の補償も受けられませんが、里山の生活にあこがれて都会から引越して来てこんな思いをするなんて、思いませんでしたので、残念でなりません。食べることのない食べ物の宝庫なのですから。(山や畑の汚染はひどいからですが) 都会にいる子供や知人に、たくさん採れる野菜や山菜、木の実を送ってあげることもなくなりました。大きな損失です。(2015-841)
I	B	15	年長組ではきゅうりやなすを育てました。しかし観賞のみです。できた野菜(自分たちで育てた)を使った料理をたべることはできません。(中略)自分たちで育てた野菜を食べたり…保育所の活動の中でやってきたことができなくなってしまった。本人たちは理解してないことも多いですが…子供たちを守るため…保育所の判断、方針についてももちろん文句はありません。ただ悲しさを感じました。こんな小さな事もあるんです。他県の方にも分かかってほしいと思います。(2015-876)
I	C	16	長男(8才)は、外であそべなくなってから家の中にいるため、(ストレスもかなりたまっていました。) 食べたり、ゲームしたり、体を動かす事が少なくなり体重も増えてしまいました。今は少しずつ短時間外であそぶ様になりましたがこのままの体形では肥満と診断されているのでなんとかしたいです。(2013-1416)
I	C	16	事故前の日常が、どれほどかけがえのないものだったのか、今さらながら感じています。5才の息子の体力は、兄や姉と比べて、かなり低いと思います。ちょっとした散歩や、家の周囲での外遊びが、幼子の体の成長にどれほど影響を与えるのか、今痛感しています。長期休暇に出掛けたり、幼稚園での外遊びはよくしますが、それ以外が全くない状況だと、とても病気にかかりやすい体になってきている気がします。鼻血もよく出しますし、下りや嘔吐も上の子に比べて多く、基礎体力の低下を感じます。家の中での遊びに慣れてしまい、ゲームに熱中することが多々あります。(2014-1077)

I	C	16	放射線に対する不安よりも、子どもの成長に大切な時期に外遊びをしなかった影響がでてきていると感じます。鉄棒ができない、自転車にのっても、すぐ疲れるなど。休日に体を動かせる場所に連れていっても限度があります。日々の中で、体力をつける方法、集中力をつける工夫が必要なのかなと思っています。(2015-755)
I	C	17	小さなときに、成長の1つの段階としてやっておいたほうがよかったこと(砂あそび、虫とり、草であそぶ等)が、ほとんどできずにおわってしまったことが残念。そうやって学び、感じるものが、他の県の子供より少なく何か乏しい状態ではないかと気になります。(2013-182)
I	C	17	自然がたくさんあるのに、草木花等にさわらせてあげることができない。海やプール、土のうえを素足で走らせてあげられないことが、親としてとてもくやし、かなしいです。自分は自然にたくさんふれてそだったので、自分の子供にもたくさん自然にふれて、そのすばらしさや、大切さを感じてほしかった。(中略)屋内施設はたくさんできましたが、やっぱり外でのびのび、ドロだらけになって遊べるようになってほしいです。外で遊ぶことを知らない自分の子供が将来親になった時、子供と外で遊べない、遊び方を知らない親になってしまうのかと思うと、とてもかなしいです。(2013-1547)
I	C	17	この2年、県内、特に「中通り」と呼ばれている福島市、二本松市、郡山市などの各地域に次々と室内遊び場ができました。走る、とぶ、まわる、のぼる、など、いろいろな身体遊びを体験することができます。放射線も心配せずに遊ばせることができます。でも、本来の「遊び」は違うと思います。子ども本来の遊びの姿はあくまでも自然と一体であり、プラスチックやビニール製、大人が意図して形づくったモノを扱うのではなく、草だったり石だったり花だったり落ち葉だったり…空の色、風において、空気感覚、四季の変化の中で自然と一体になって遊び、遊びながら子ども自身も変化し、いろんなことに気づき成長していく、それが本来の子どもの姿であり、大切な大切な子ども時代にだけ与えられた特別な時間だと思います。室内遊び場はもういりません。自然とともにのびのびと遊び外をかけまわれるようになってほしい。やっぱり、原発事故前の福島にしたいと思ってしまいます。今の子ども達が大人になった時、遊びの感覚を知らない大人社会、日本社会、ちょっとこわいです。今も心配だけど大切、未来はもっと心配です。(2014-1356)
I	C	18	子供を外で自由にあそばせてやれないのは母子共にもものすごくストレスを感じています。支援センターなどでは駐車場の空スペースがなかったり車を使わないと行けないところがほとんどなので遊ばせる場所も限られてきてしまい、とても不便でこれにもストレスを感じてしまいます。とにかく原発事故後はまわりのママ友もほとんど避難したり遊ぶ場所も限定されたりと1人で幼い子供達の面倒を毎日見ているのはすごい大変です。(2013-451)

I	C	18	（子ども達の遊びたい気持ちを抑えつける事は出来ないから仕方なくやらせる→見ている親の気持ちは穏やかではない。周囲の目も気になる。→親にとって強いストレス→だから遊ばせないようにする→子供にとってストレス・不健全。こんな悪循環がいつまでも続く）こんな小さな不安は原発の是非を問う政治の場には全く届いていない。(2013-1691)
I	C	18	事故間もなくの頃、子供達が外で遊びたいのにさせてあげられなかった。放射線が子供の体にどんな影響があるのか、将来に影響があるのか、わからないからこそ、不安や心配になり外遊びを禁止しました。子どもを大切に思い、守りたいからこそその行動でした。しかし、子供の自由をうばい、我慢をさせ、小さな子供の心にどんなキズを作ってしまったのか…今でも考える事があります。申し訳ないと…とった行動が良かったのか、悪かったのかそれもわかりません。これからも考え、悩む事は続くと思います。子供だけではなく、親の心にもキズを残しているのです。(2015-703)
I	C	19	幼稚園にこの春入園しますが、上の子たちと全く違う環境となってしまう、外遊びなどで、友達のかかわりをもたないまま、入園となってしまうそうです。体力も、きっと低下しているのではないかと思います。(2013-337)
I	C	19	外に出る家族が原発前よりかなり減ったので、子供が外で遊ばず、子供が友達を作る場所が減ったのがかわいそうだ。幼稚園での友達はいるが近所で一緒に遊べる友達がおらずかわいそうです。(2013-584)
I	C	19	今回調査対象となっている4歳の娘の友達は皆避難してしまい、今現在も地元には戻っていない。去年の春、幼稚園に入るまで、そのせいで同世代の子供と遊ぶことは全くなかった。とてもかわいそうだった。事故前は、外で遊ぶのが好きな子だった。自分の畑道具を持って、ひいばあ畑で遊ぶのが大好きだった。お花を摘んだり、庭でプールで遊んだり、砂遊びとか…。今は家の中で妹と2人で遊んでいる。(2013-834)
I	C	20	我が家の子ども（4才児）は、砂あそびを知りません。保育園では、外遊びも制限されており、休みの日に室内の遊び場がある（砂場）施設につれていったのですが…とまどうばかり。その様子を見て、がく然としました。(2013-636)
I	C	20	子供が事故前に行っていた公園を通ると、「放射能がなくなったら、お弁当持って来ようね!」と言います。胸が痛いです。土を入れ替えたと言っても、実際小さい子供が公園で遊んでいるのを見ません。そこでお弁当を食べるのは抵抗あります。4才の子供の「公園でお弁当が食べたい!」こんな簡単なお願ひも聞いてあげられない場所になってしまったと思うと悲しいです。(2013-1591)
I	C	20	この文章を書いている私の横で、息子（5才）が「土が触れて、まっほっくりも花も草も、触って、いっぱい外で遊べるようになりたいですって書いたら…?」と言っています。子ども達自身も、何か、心身共に、感じるものがあるのだと思います。が、逃げる事ができない状況です。(2014-1212)

I	C	21	7才の子も4才の子も毎日ゲームをするだけで外遊びをすることがなくなりました。子どもが外で遊びたがらないのです。きっと事故後ずっと外出を控えたり、外遊びをしていなかったからでしょう。運動不足も心配ですが、子どもたちが「外遊び=楽しい」ということを忘れてしまったことや外は遊ぶ場所でなく、放射能があって危ない場所と思っていることにとっても悲しく思います。(2013-513)
I	C	21	震災後、外で遊べないことが普通となり、子どもたちが外で遊びたいといわなくなりました。普通ではないことが普通となっていることに不安を感じます。(2014-1033)
I	C	22	室内のあそび場は、密集してせまい空間にいるので、カゼや感染症をもらいやすく、行く時も最大限の配慮が必要。ケンカ等トラブルも起こりやすい。室内のあそび場があるだけ恵まれているのだとは、思いますが、気がねなく早く外でたくさん遊べる福島に戻ってほしい。こどもは、この一年砂にさわっていない。(2013-16)
I	C	22	屋内運動施設もたくさんできましたが、年齢の規制(未就学児までなど)があると、未就学児と小学生のいる兄弟を連れて行くには辛いです。また、遊具もたくさんあってありがたいのですが、存分に「走れる」場が無いです。6才の年長児を遊ばせに行ったら、小さい子連れのお母さんにとっても嫌な目で見られてしまいました。それ以来行きづらいです…(2013-2038)
I	C	22	子供達のために、福島市にも、室内で小学生が体をたくさんつかってあそべる場所の一つでいいので作ってほしいと何年も色んな人が言ってきましたが、今もありません。小さい子むけの室内は7個ありますが、体をたくさん動かしたい小学生が、そこへ行くと、走るな!!と注意され、体をめいっぱいつかう室内あそびなんてできません。本当に小学生くらいの子供達がかわいそうです。何一つ変わらないのだから、その一つくらいは、かなえてほしいです。と話しても、何もしていただけないのだな…と皆、本当にあてにはしていません。(2016-481)
I	C	23	体力も落ちているのかと心配して、スポーツ教室やプールに行ったりお金もかかり大変です。でも全て子供のためと思い忍ぶ毎日です。(2013-646)
I	C	23	子供を安全に、安心して戸外あそびができる様、週末は時間とお金をかけて県外(又は会津方面)へ出掛ける機会が増えています。正直、心と体は働いてもいるのでクタクタです。(2013-2147)
I	C	24	子供を外であまり遊ばせなくなった為なのか、顔色が青白く、去年は低血糖症で4回も入院してしまいました。時間が経つにつれて、色々子供達が弱っていく気がして不安です。原因がはっきりしないので、とても心配です。(2015-381)

I	C	24 原発事故が原因で、子供達と毎日外遊びをすることができなかったことが悔やまれます。せめて、1年でも安全なところに引越し、心おきなく毎日外遊びをさせていたらと思返す毎日です。というのも、中1(13才)の娘が脊柱側弯症を発症しています。外遊びをやらせたくない私の判断で、家の中で静かにすごしていた事、下の弟2人が小さいこともあり、娘にかまってあげられなかった事、などが原発事故で、汚染された土、空気にふれさせることができなかったことが、毎日体を動かすこと、習慣にできなかったことが、残念です。脊柱側弯症の原因はわからないとお医者様もおっしゃっていましたが、普通の生活が送れていたのなら、と思ってしまう。すぎてしまった時間はとりもどせないで、これからできることに、目をむけていけるようになりたいです。(2017-463)
I	C	25 仕事をしていて、帰りも遅いので、子どもを遊ばせに行くことができない。体力づくりの施設があるのは知っているが、平日、祖父母に頼んでいるので、連れていってとは頼めない。土日は、家事や買い物でおわり、思い切り子どもが体を動かして、体力づくりをするような環境をつくるのができていない。できれば、小学校や幼稚園で、いろいろとやっていただきたい。新聞などに取り上げられている取り組みは、ほんの一部。継続して、いろいろな子どもたちにそのようなサービスが行き渡るような努力を、行政でしていただきたい。親も、してあげたいけどなかなかできない。行政の方は、自分の家族や子どもがもし〇〇なら、という気持ちでやってほしい。単発的な取り組みだけ大々的にマスコミは取り上げるけど、それは一部。90%の子どもは、外であそべていないのが実情。本当は運動会も外ではやりたくない。将来私たちが死んでからの子どもの健康が不安。(2014-1579)
I	C	25 震災後、上の子たちに経験させてきた事が全く出来ず、ただひたすら保養を探して福島から連れ出していました。そのことで、上の子たちとの思考や行動とはかけはなれた現在の状況に悩んでいます。普通に、出来るだけ「ダメ」と言わない生活を送ってあげられなかったこと(土、水、草、木、石など、小さい子が大好きなものを自由にさわらせること)に引け目を感じ、キチンと善悪を教えてあげられなかったのかもしれない…と考えてしまいます。震災後は、子供と過ごす時間を、それまでに必要のなかった雑事(保養先をさがしたり、手続きしたり、自分で放射線について学んだり)にうばわれ、とくに〇〇に手をかけてあげられなかったのでは?とつい考えてしまいます。直接の影響ではないだけに、関係があるのかないのかさえもはっきりしないので、どこまでいっても答えが出ません。何もなかったとしても、今のように育ったのかどうなのか、そこが知りたい…。(2017-655)
I	C	26 まだまだ外遊びをさせるのは不安がいっぱいですが幼稚園に行くとうとうしても園庭等で遊ばせないと子供達も言う事を聞いて帰ってくれません。他のお母さん方への手前、強くも言えずにいます。冬の時期、インフルエンザ、ノロ等も心配だし、屋内施設で遊ぶのにもちゅうちょしていました。(2014-1575)

I	C	27	次男は異染性白質ジストロフィーといって難病におかされて、去年の今ごろは普通に生活ができていました。けれど、去年の5月頃から病気が発病し、今にいたっては、歩く事も自分で動く事も、手も自由に動かす事ができなくなりました。今では、私(母)がすべての事をしてあげています。外あそびが大好きだった二男は、放射線のせいで、自由にあそばせる事もできず、ずっと我慢させていました。それなのに今では、全く外で自分で走り回る事ができません。あの地震が、放射線がなければ、元気なうちに、いっぱいあそばせてあげられたのに！と、くやむばかりです。原発がにくいです。こんな病気になるのなら、たくさん自由に好きな事をさせて、好きな物を食べさせて、好きな事を、もっともっとさせてあげたかったと胸が痛いです。(2013-1599)
I	C	28	秋に、住宅除染が終わり、庭先や家の周りで外遊びをさせていますが4年間の習慣(クセ)でしょうか、外遊びする子どもの姿を心から喜べない自分がいます。(2015-504)
I	D	29	いつまで保養を続けたら良いのか…身体もお金も気持ちもツライ。自分自身も不調だが、最低でも月2回は県外に出掛けないと、と思っプレッシャー。(2016-59)
I	D	29	毎月、保養を探して出かけるのも正直疲れました。子供は旅行気分を楽しみにしてくれていますが、(自分の)労力、体力、金銭的なこと…余裕が無い中で出掛けると出費にイライラしてきて結局子供に当たってしまうこともあります(ひとり親だと特に大変なんです)。(2015-266)
I	D	29	保養を次から次へと探す日々には変わりありません。今のこの時期には春休み、GWの保養を考えています。春休みは以前から交流がある方にお願ひして2泊は確保しました。他にも子どもだけで行かせようか悩んでいる最中です。いつもいつでも先に先にと考え、保養先を確保しなければなりません。それが日課となっています。いつまで続くのだろうか？子どもが中学生になったら？それとも高校生？この先どうなるのだろうか…と。たまに心の底から疲れたな、と感じる時があります。子どもはどんな思いで行っているのだろうか、とふと思う時もあります。今回の冬休みも稚内に行かせましたが「だいたい楽しかったけど、少し寂しかった」と言われると申し訳ないなという気持ちにもなります。お金も掛かります。いくら交通費補助があっても手出しはあります。福島の実家にて近所に遊びに行くのとは違います。未知の経験も出来て、沢山の方と知り合えて…それは素晴らしいことですが生活にはやっぱりお金が掛かります。(2017-329)
I	D	30	夫は保養を安く行ける旅行と勘違いしてきており、夫婦間に温度差をとっても感じている。(2017-34)

I	D	30	ある新聞社が原発被害による保養について記事にしてくれた。初めはその必要性について問われ、保養に批判的だった記者さんが、親として子どもの将来を心配する気持ちを、自分も同じ親として考えてくれるようになって記事にしてくれた。しかし、その記事が新聞に載ると、新聞社に非難の電話が殺到したとの事。私達は復興を邪魔する気などない。ただただ見えないものに不安があるだけ。子の未来を心配する親がいる。たったそれだけなのに、なぜそれが非難されなくてはいけないのか。色んな考えを持つ人がいる、それは尊重されることであって他人に否定される事ではないと思う。その気持ちをどこにぶつければいいのか。それに対して不満も不安もあるし、それを共感する仲間も探せない。(2018-556)
I	D	31	「保養」っていうコトバ、大嫌いです。「保養」しなければ生きていけないような所に住んでいると言われているみたいで。(2017-499)
I	E	32	昨年、9月に赤ちゃんがいるにも関わらず、年配のみの方の世帯よりも全く優先されず、やっと自宅の除染が終わりました。見ず知らずの男性たちが5～6人、数日家の周りにいて、何を見ているのか分からないという状態はすごく不快でした。除染した土は敷地内に置きますが、いくら、厚いシートで包んでも、雨、風で劣化し、1年以上前に除染したが、シートが破れ悪臭を放っているという友人宅でも、またあの男の人達が来ることを考えると、無料で補修してもらおうのも嫌だという話です。(2014-523)
I	E	32	除染作業にたずさわる方々の一部で良くないことのウワサもあり、小さい子供をもつ親としては治安が心配で、子どもだけでは決して遊びに行かせられません。(2016-117)
I	E	32	一部の除染員の方々は他県から出稼ぎに来てくれていて、一生懸命な人もいますが、一方でニュースにもなっていますが、物取りや車上荒らし、わいせつ、ゆうかいなどの事件が多発しているのも事実で、こののどかな福島が少し変わってしまっているように感じて、子供達をのびのびと遊ばせることができないのが、今の状況です。(実際、登下校中、声をかけられた子供が多くなりました)(2016-990)
I	E	32	除染や廃炉作業の作業員の方が浜通り(いわき方面)には住むことができず、二本松のアパートをかりて住んでいます。全国から、身元を明かさず自治会にも参加しない方がたくさんたくさん市内に住んでいて、もともといる市民とのトラブルも続いています。そういう作業員の方のゴミ処理も市民の税金でまかなっているのです。(2017-678)
I	E	33	マンション周辺で除染作業が始まり、以前より線量が下がり、喜んだのも束の間、マンション周辺から出た汚染土が私の家(1階)の目の前に置かれました。窓を開けると大きなブルーシートがあるので、除染後は洗濯物を外に干さなくなりました。また、景観も悪くカーテンをあげる度、放射線のことを思い出し、気が重くなります。早く中間貯蔵施設を決めてもらいたいです。(2014-903)

I	E	33	敷地内に保管されている「フレコンバッグ」が、結局、野ざらしで、身近にある。風化して、袋がやぶけていないだろうか。4年間たって、つつみなおすとか。もう、決心して、人が住めない地域（飯館とか）に対して保管場所として全部うつして隔離するとか。とにかく、住まいにあることが、不安、不満。(2015-681)
I	E	33	近所の公園に、除染で出た汚染土壌が一時保管されることになっていった。どうして子どもたちが遊ぶ場所に…。近くに公園がありませんので、道路で遊ぶか、車で大きな公園に行くしかありません。(2017-860)
I	E	34	となりの家を除染した際には外に洗濯を干していた為、水しぶきがパンパンかかって窓から壁から洗濯から全部汚されるし、ふんだりけったり除染した芝生→焼却 土→しき地内にうめる このやり方にも大きなギモン、イワカン・・皆感じないのかなあ… (2015-508)
I	E	34	昨秋家の除染があり、芝生や、草花が取り除かれ、新しい芝生は植えてもらいましたが、今まで育てて来たのという思いの方が強く、もう何かを植えようという気持ちになれないままです。庭には汚染土をうめてあるという標の黄色い杭があり、それを見るたびに気分が落ちこむのを感じます。(2015-618)
I	E	34	私の住む福島市北信地区の瀬上町では、最近ようやく住宅除染が行われるようになりました。喜ばしいことではありますが、少しずつ忘れかけていた放射線への不安や実態をあらためてつきつけられ、とても心が沈みました。アパートの周辺では、玄関付近のジャリが0.5～0.6マイクロシーベルト/hと高めの数値が出ており、ジャリをすべて取りかえ地下にうめるようになります。地下保管…それも嫌です…。ですが、さらに、アパートに面する道路や側溝の作業は北信地区の仮置場が決まっていないため、行われないとのこと。これから小学校に通う息子のことが、とても心配になってしまいました。(2015-799)
I	E	35	夫婦、義父母が子供たちを思いできる限りの除染をした。子供たちが少しでも、外で遊べるよう、土を削り、新しい砂を敷き又砂利をまいたり、コンクリートにしたり…。その費用を東電は、一体どうしてくれるのか…。(2013-1451)
I	E	35	校・公園等の除染がすすみ、次は各家庭の除染を待っていたのですが、「その地区はH27年度です」と…。待っているうち、子は育ってしまうので、自費で、家周囲の除染がてらの工事をしました。原発事故前のように自由に庭で遊ぶ姿、うれしく思っています。でもちょっとくやしい。領収書も「除染代」として、きれないって言われた。(2014-1591)
I	E	35	時が経ち、5年も経過して線量を計ると、0.23マイクロシーベルトを下まわり、除染をしてもらえないというなんとも悔しい結果の家がたくさんあります。もっと早く除染をしていればもっと値は高く…とても腑に落ちないです。しかも自分達でお金を出して、業者にやってもらったお金は、期限10日だけ過ぎているので東電には補償してもらえませんでした。(2016-215)
I	E	36	除染をつづけても数値にあまり変わりはない。除染での工事車両で子供の危険も増すし、空気も汚くなる。(2017-255)

I	E	36	除染はしたとは言え全く影響のない普通の家には戻りません。補償の対象にも郡山はなっていないのでどこに気持ちをぶつければいいのか…。そのせいで家に居ても1階にはおりてこないように口をうるさく当時は言っていました。又、少しでも線量が高いところには居させたくない気持ちから（家に居ても線量が高かった為）学校での体育・外遊び、しばらく制限させてきました。私自身とてもストレスになりました。そして今でも子どもにつらい思いをさせてしまった…とその時のことを思い出しつらくなります。(2017-645)
I	F	37	本来ならやらなくてよいはずの甲状腺検査も…あの事故がなければ…その時間を別に使えたのに…と思います。(2015-216)
I	F	37	甲状腺検査やホールボディカウンターをやりに行くたび、何でこんなことをしなくてはいけないのかと、とても不安になる。子どもに何かあったらどうしたらいいのか、なぜこんな思いをしなくてはいけないのかと思う。とにかく、子どもの将来が心配です。(2015-272)
I	F	37	ちょうど明日も、小学校で甲状腺検査があり、気持ちの面でも、子供にもかわいそうです。今まではわざわざ指定された場所に行き検査をしていましたが、今回から学校でやることになりました。他の県の子供はやらなくていい検査をこれから続けなくてはいけないかと思うとつらい。(2017-105)
I	F	37	世間が、子供達が、検査を受けつづけていることを、忘れてるような気がします。このまま一生検査を受けさせなければいけない事を、子供に本当に申し訳なく思います。(2018-138)
I	F	38	去年の4月から転勤により宮城県に住んでいます。福島に住んでいた頃は、ホールボディカウンターの検査は近くで受診できていました。引越してからは、宮城県では受けることができず、わざわざ福島まで行かなくてはならず、主人や子供が休みの土・日はやっていないので、受けられずにいます。さらに交通費がでるわけでもないのに、正直、誰のための検査なのか、ただデータをとるためだけで、福島に住んでいる人はモルモットなどにされているとしか思えないです。もう少し県外に住んでいる人の負担も考えてほしいです。(2015-150)
I	F	38	甲状腺検査やWBCは仕事を休んで行かなくてはならないし（自分と、子どもと別の日）、積算量計の携帯も手間だし、その、生活記録票の記載も、子どもの人数分。とてもストレスになります。「やらない」という選択もできますが、それはそれで不安です。でも、生活記録票の記載は、もう無理！！次年度は、やめようと思っています。(2015-832)
I	F	38	震災後、甲状腺検査などに行く際の交通費を出してほしいです。場所によっては少し遠い所を指定されることがあるので。消費税もupしたので家計に負担がかかります。(2015-927)
I	F	39	甲状腺検査の結果を見るのが怖い。これから先、何年もその気持ちが続く。将来、子供達が病気になるのではという不安が心から消えない。(2013-397)

I	F	39	先日子供のエコー検査があったが、もしかして出るのじゃないかとドキドキして、心臓に悪かった。まだ結果がきてない為、不安でいる。これがあと何年も続くのだろうかと思うと、いやになる。心の風化はしない。増してきてる。(2017-461)
I	F	40	線量測定バッジを申込み人も激減していますが、ウチは息子2人に持たせています。(ランドセルに入れて) H27.5～11月迄でも0.14mSv 積算線量があり、「0」では無いという事。まだ終わってはいないし、検査も受ける・受けないの決定権は親なのに、「もう良いでしょ」と口にする親がいて、温度差があるのに気がきました。(2016-818)
I	G	41	外出先で親子連れを見ては、「あの人も私と同じように不安や不満を持ちながら暮らしているのだろうか？」と思うこともあります。約4年たち、娘の同級生にも弟や妹が産まれました。私は福島で子育てを続けていくことそのものがとても負担に感じているので、今いる子のことだけでいっぱいなのですが、事故後にここで妊娠・出産した知人たちのことを思うと、強いな…と思うと同時に不安はないのか、彼女たちはもう事故前と同じ日常を生活しているのか？対応できない自分がおかしいのか？と色々なことがぐちゃぐちゃになってよくわからなくなります。(2015-738)
I	G	41	震災で娘を一人っ子にしてしまい娘に大変申し訳なく思っています。実は震災の年に、2人目を…と考えていましたが、震災で「もう子供はあきらめよう!!」と思いました。(2016-769)
I	G	41	今のところ息子には何の異常もありませんが、今後の健康、未来に不安を感じずにはられません。2人目もあきらめることにしました。今ある幸せを大切に守っていくことで、私達は精一杯だと思っています。(2018-180)
I	G	42	原発事故後、家族設計がくるってしまった。長女はもう5歳になるが、原発のことで、いろいろと悩んで兄弟をつくってあげられなかったことが悔やまれる。3年がすぎ、そろそろ…と思ってチャレンジするものの、2回も流産という結果になり、「原発事故のせいでは…」と考えてしまうことも多い。原発事故のせいで、たくさんの方々の人生プランがくるってしまったことは確かだと思う(線量の関係で新築を泣く泣く手離れた知人もいる)。(2014-1567)
I	G	42	原発事故による放射能の影響で事故後数年、2人目の子どもを産んでも大丈夫か、不安と心配で2人目がつくれなかった。もっと早く子作りしたかったのに大丈夫か、不安と心配でできなかった。35才で1人目ができ36才で原発事故(放射能)1人目も高齢出産だったので原発事故さえなければ36,37,38才で2人目がほしかった。今も兄弟がいれば…。ほぼ毎日のように悔やんでいます。原発さえなければ…。(2015-944)
I	G	43	二本松は、放射能が高いにもかかわらず、避難区域に入らずとても不安です。その為私も当時お腹にいた子供をおろしたまでです。(2013-2433)

I	H	44	<p>原発事故後、1ヶ月程度は子供達を長野県の親戚の元へ避難させ、私自身も職場の理解が得られた為、2週間程度休み、一緒に避難しました。私の母にも同行してもらい、長野にて子供達と共に過ごしてもらいました。不自由なく子供達もある程度笑顔で過ごせて良かったと思っています。学校が再開してからはやむを得ず郡山に戻りました。その後は毎日の家の水ふき、外周りのそうじ、遠い地域の食材購入、休日の遠出…連休には長野への避難…。体力的にも経済的にもとても負担がかかる日々を過ごして来ました。賠償金ではとてもまに合わず、貯金もほとんど使いました。窓が開けられない夏にエアコンを設置し80万の出費…（今までは不要で設置してなかった）もうすぐ2年になりますが、今は諦めと言うか、背に腹は代えられないと言うか…子供達が何事も無く成長した時には進学等たくさんのお金がかかってくるので、これ以上お金を使ってしまう事はできないと考え、「大丈夫」と思う事にして、事故前の暮らしに戻っています。野菜は以前の自給自足は無理ですが、地元の物でも売っている物は大丈夫と思うようにしています。福島に住むには今までよりお金がかかります。子供達が大人になるまでは、少額でも長く続く賠償金が必要だと思います。今までかからなかった経費について補償してほしいです。(2013-388)</p>
I	H	44	<p>事故からもすぐ2年がたちますが、未だに原発事故に伴う出費（放射能除去に良いとされる食品や、県外産の米・野菜の調達、子供のために車で往復2時間かけて公園など移動をし、ガソリン代、一時疎開による二重生活など）で、いくら賠償金（家族全体で80万ほど）を受けとつても、震災前の貯金まで戻らないし、未だに赤字の生活。震災の心労からくる精神障害で、やっとのこと見つけた産後初の社会復帰だった、好きな職場も病気により社会適応が出来ず、1年程さらに貯金を切り崩しての生活。現在も病気は落ちついたり再発したり。でも、生活していくために再出発して今に到ります。(2013-2138)</p>
I	H	44	<p>当時は、福島市に住んでいましたが、地震の時に家のかべが割れ、家の中から外が見える状態でした。ただそれだけなら直ただけで今も住んでいられる位でしたが、原発事故で家の中にまで放射能が…。リフォームしたばかりだったのに、子供が小さい為不安もあり、家を建てました。リフォームと住宅ローンの二重苦です。でも、中通りにはなんの補償も賠償もなく、浜通りの人達には億単位の賠償。不平等すぎですよ。(2014-963)</p>
I	H	44	<p>年収400～600万ですが、実家をリフォームして住んでいましたが、地震で家の壁に亀裂が入り、そこから放射能が入り、その部屋だけ今でも3.0 μ Sv/毎時あります。いくら家を直しても、下がることもなく、まだ小さい子供も居た為、福島市から伊達市に移り家を建てました。しかし補償があるわけでもなく、リフォーム代と家のローンを二重で払っています。ただの地震だけなら、苦しくもなかったはずなのに、原発事故のせいで大変な生活をしています。(2016-978)</p>

I	I	45	原発事故後は子育てに不安がある生活になってしまいました。経済力も力もない私は、この地で一生生活していきます。しかし、将来、子供達に肉体的・精神的ないたみをさせてしまうのかと、不安になってしまいます。(2013-446)
I	I	45	これから、この子たちの将来が不安でたまりません。健康、運動能力、精神面すべてにおいて不安です。本当に思うのは、のびのびと外でなくにも心配することなく遊ばせてあげたいということです。(2013-1132)
I	I	45	目に見えないものです。子供たちは理解にむずかしく、親もあまり分からないので、説明するにもきちんと伝えられない。なので、日が経つにつれて、忘れてきています。ただ、心の奥に不安だけがこった感じです。未来のある、これからの子供たちへの心や体が心配です。見えないし、すぐ答えも出ない。だから不安が大きいです。(2014-918)
I	I	45	本当の怖さはこれからなんだと感じています。子供たちが成長していくにつれての身体への心配も大きくなってくると思いますし、自分自身の健康への心配も少なからずあるのは事実です。子供たちが将来苦しまなくて(原発のことで…)済むように…なれば…とは感じています。(2015-45)
I	I	46	原発事故が起き、放射能問題で色々な悩みや不安な事はたくさんあります。放射能に対して、今までにない事なので、何を信じればいいのか、正直分かりません。食べ物や、外遊び、判断するのは、親の私。この先、子供達の体は大丈夫か？子供達の子供は、本当に大丈夫か？(2013-1084)
I	I	46	放射能そのものの健康への影響不安もありますが、家の事も守りながら、なおかつ"原発"があって、"そこら中に放射能(性)物質が散らばっている"という緊張感をキープしながらずっと生活していく精神的ストレスは、想像を超えたいと思います。(2014-2473)
I	I	46	普通の生活を送れていいと感じますが、本当にこれでいいのだろうかとも不安も感じます。将来、子供達が、県外の子供達と比べて放射能の影響がでるのではないか、あの時福島にいたから…と差別をうけるのではないかと考えればきりがありません。福島の本今の現状はどうなんだろうか、自分でもわからなくなります。不安があっても、正直口にだすことができません。話しても解決法がなく、自分にストレスがかかります。(2015-242)
I	I	47	私自身の話ですが、原発事故～1年くらいまでは、放射能による影響について知識が乏しくあまり深く考えていませんでした。しかし、子供の甲状腺エコーの結果、A2判定で嚢胞があることを知り、だんだん怖くなっていきました。そして、無知でおろかな自分を責めました。何故あの時逃難しなかったのか、何故あの時子供を外に出してしまったのか。たぶん、この後悔は私が死ぬまでずっと続くのだらうと思います。(2013-250)
I	I	47	本当に子供が大きくなった時に身体に害がないと言えるのか。誰か、教えてほしい。事故当時、知らないで外で遊ばせてしまった私の責任は測りしれない。悔やんでも悔やんでも、もう遅い。今は見て見ぬふりで平静を保つほか術はない。(2013-1130)

I	I	47	私が小さい頃は、住みやすかった福島県でした。私が親となり、同じように←(私の小さい頃のように)普通に暮らしていけると思って子育てをして来ました。それが、あの事故のおかげで、居心地の悪い場所で子供たちを育てていかなければならない。とても苦しいです。あの事故さえなければ…。時々思います。子供たちの将来のこと。子供が病気になってしまったら、きっと私は母親失格だと自分を責めるだろうと思います。避難しなかった私を、親としてダメ、親失格と思うだろうと思っています。でも、現実はとてもきびしく、避難できていれば、もうとっくにしています。私は、普通の生活、普通に暮らしたかっただけで大きな夢をもっていたわけでもない。家族みんな、笑顔で暮らしたかっただけなのだと思います。(2015-894)
I	I	48	父、母は畑ができず、何もしないでいるうち、健康状態が悪くなってきました。どこかで生活を変えるきっかけが欲しいです。(2013-1365)
I	I	48	昨年末、私自身が病気になり、とても大変な1年になりました。(子供にとっても)少なからず、震災、原発事故でのストレスも原因の1つになったと私は思っています。子供たちのためにも元気になりたいと思っています。(2016-224)
I	I	48	震災後が特に(性格)変わり始め、現在も続いています。震災前は、普通に楽しく過ごしていましたが、後(震災)になってうつ病に近い感じになってしまって子供にあたる日々が続きました。私も病院へ行きたい気持ちがあったのですが、なかなか行く時がなく、家にこもったままです。子供にあたらぬ様には気を付けているのですが、「原発」の事になると、どうしても気分がすぐれません。(2014-1234)
I	I	49	将来に全く不安がないわけではないし、ふつうに暮らしていても、小さな不安は残っている、消えない気がします。(2013-1252)
I	I	49	今は元気に過ごしている子供達が、数年後、何らかの症状が出たら…と考えると、とても不安になります。(2014-837)
I	I	49	普段は原発事故の事は忘れてるし、子供達が不安を訴えてくるような事も一度もありません。でも、ふとした時に子どもの健康や将来について不安になり、このままでいいのかな、正しいのかな、後悔することになったら嫌だから、今できることをしておかなければならないのでは、とあせるような気持ちになります。(2018-409)
I	I	49	子供の健康について現在あまり問題が無いように思っていますが、子供の肥満が全国でも多いことや、運動能力が低下している事実を知り、大なり小なり影響があることがわかってきたことにより、子供の将来に影響がどれほど出てくるのか、見えない不安がずっと続くのであろうと思います。(2015-200)

I	I	50	なるようにしかならないと、プラス思考でやってきましたが、今年の子供の検査でA2判定をうけて、深刻さを痛感していた所です。やはり、気持ちの問題ではなく、私の考えが甘かったのかと反省もしていますが、あの時どうにもできずにひたすらにしてきたこと、そうするしかなかったという思いもあり、複雑です。これからの検査ももちろんですが、こういう思いをずっといっていていくと思うと、くやしい所もあります。何とも言えない、けれど体のことばかり考えていられない、という思いと、ただできることは、子供がこれからもなにごともなく大きく成長していつてくれることを祈ることだけです。(2015-164)
I	I	50	目に見える健康は特にないものの、先日(11月)の甲状腺検査の結果が受診のたびに悪くなっています。兄、姉も、同じです。受診のたびに判定の結果が悪くなっています。5年後、10年後…と言われていたのが現実になってきています。これからが、心配です。(2017-488)
I	I	50	今回子どもの、のどの腫れが気になり、甲状腺外来を受診すると"4.6mm"すぐに内服開始となりました。半年で体重が0.5kg減少していたことも気になりました。震災、放射能の影響かともとのものなのか誰も何も分かりません。そのことも不安になっています。そして将来子供の健康はどうなっていくのか、福島にいたことは正しかったのか考えてしまいます。誰かに震災、放射能のことは関係ないと断言してもらえた方が楽だと思います。先日受診時、子供が先生に「早く大きくなりたいし、サッカー選手になりたいから、薬の量を増やしてください。」と自分から言っていたのを聞いて、胸が痛みました。(2018-790)
I	I	51	癌のリスクも高くなるという事なので、子供達の体がとても心配です。本人は大丈夫であっても大人へなり五体満足で丈夫な赤ちゃんが生まれてくるかとても心配になります。放射能放射線汚染されたので一生付き合わなくてはなりません。(2013-2386)
I	I	51	子供達が大人になった時、「原発事故がなければこんなことにはならなかった」という状態になるのではと考えてしまいます。まだ子供も小さいのですが、もし大人になって病気が出てきたら…産まれてきた子供(孫になる子)になにか異常が出てしまったら…不安に思うことがたくさんあります。(2015-916)
I	I	51	もし、この子たちが結婚をし、その子供が産まれた時に、何か、病気で産まれてこないか…と時々考えてしまいます。チェルノブイリの事故で次の世代に産まれた子供たちは、80%の確率で、生まれつき、疾患があるそうです。そう考えると、私たちの不安は、死ぬまでなくなるのかもしれないかも知れません。(2018-509)
I	I	52	健康状態については…特に子供の事は心配です。専門家の話もばらばらで何を信用すれば良いのかも悩まされています。東電や国は、福島の親や子供が心配している事を本当に分かってくれている気がしません。ただ、検査をいろいろとしてくれたとしても、全然安心できませんし、反対にこの数分で終わる検査でちゃんと分かるのか?など不安などが増していきます。一生ついていく不安です。せめて子供達が笑顔でいられるように国や東電は、ずっと考えてほしいと思います。(2013-261)

I	I	52	除染をしたり、食べ物の放射線を測定したり、甲状腺検査や子供がとても嫌がる血液検査、健康診断など震災以降いろいろとやっていると思います。数値がわかっても専門の方に見てもらって「大丈夫」と言われても、何がどう大丈夫なのか親としてすっきりすることはありません。あんな大事故がおきて、大丈夫で、5年たった今では、何もなかったかのように普通に生活していることに。だったら原発というものは、むしろ、事故がおきても大丈夫な安全なものなのかと屁理屈さえ言いたくなります。もちろん、現状の子供の健康（親もふくめて）、現状の食べ物、現状の空間線量など、検査結果を見て異常がないと判断するのはわかるのですが、誰も経験したことのない、研究されていることも憶測な部分があるのでは？という中で将来にわたってのきちんとした判断なのか、そう判断することはできるのか、疑問ばかりで、親としては、いつまでたっても不安で不安でいう気持ちがあります。そのような気持ちがまだあるので、生活する時の行動に、ブレーキがかかることはあります。何も不安を感じずに、のびのび子育てができていたと言ったら、いまだに、心配しながらの生活だし、家計にひびく（出費が増える）こともいろいろあります。（2016-638）
I	I	53	震災、原発事故からまもなく2年がたとうとしています。最近、外あそびをする子どもも増えてきて、元の生活に戻りつつあると感じています。我が子たちも昨年夏ごろから自宅周辺の外で遊ぶようになりましたが、放射能の心配がなくなった訳ではありません。いつもどこかで気にしながら…外で遊んで大丈夫かな…家の中ばかりではたいくつだし…毎日葛藤しながらの生活です。（2013-1421）
I	I	53	子供達を、もっとのびのび外で遊ばせたい…将来に不安だらけで、悩んでいます。このまま、福島に住んでいて、本当に大丈夫なのでしょう？いつも頭の中は、その事ばかりです。（2013-1716）
I	I	54	今現在、福島で生活しなければいけない以上、意図的に無関心にならざるを得ない状況もあると思う。気にしていたら自分の身や生活が成り立たない。今、親（私自身）の判断で、子供と福島に残って生活しているが、将来健康に影響があったり、福島出身ということで差別があったら、子供に対して親としてどのように説明し詫げればよいのか分からない。このようなことを、普段はあまり意識していなくても、甲状腺検査やホールボディカウンター、線量計結果などのお知らせがあると考えてしまいます。（2015-890）
I	I	54	子供には親が不安がっている姿を見せてはいけないと思っているので、いつもニコニコ笑顔でいなければ、などと必死に動揺をかくしているからそんな自分に疲れる。みんなが寝たあとふと1人になるとどうしようもなく暗くなる時がある。すぐ持ち直そうと努力はするが。子供達はずっと健康で楽しく笑って人生を送ることが出来る！！必ず！！と思っているが、新聞やテレビなどで、甲状腺の異状が見つかる人が増えたと聞くと、将来が不安でたまらなくなる。考えても答えが出ないのであまり考えないようにしている。そこだけ心にフタをして見ないようにしている感じ。（2014-1296）

I	I	55	結局、親は「自分が子どもを守る」「ある程度の被爆を覚悟する」という決断を持って、一生、生きていく事になるんだと、半ばあきらめております。(2013-1850)
I	I	55	ここで生活する限り、気にしてばかりはいられない、忘れて当たり前の生活をする。もうそうして良いんじゃないかと思う気持ちと将来的な子供への影響は消えるものでもなく…そのせめぎ合い、1人心の中で静かに続いているという感じ、諦めと不安…。(2017-651)
I	I	56	子供達が、"のどが痛い""具合が悪い"と口にするたびに放射線の影響では?とすぐに思ってしまう。(2013-2591)
I	I	56	ちょっとどこかいたい、とかせきがでると、「もしかして」とやっぱり考えてしまうことが多いです。何もないうまま、大きくなってもらいたいです。(2013-1632)
I	I	57	事故が起きてしまった事はしょうがないと思ってあきらめるしかないが、事故さえなければ、子供ももっとのびのび遊べたし、将来的に体の不安をかかえる必要もなかった。自分の住んでいる地域は被害は少ない方だとは思いますが、事故によって受けた影響は生活していく中でかなり大きいと思う。できる事なら事故前に戻りたい。(2015-817)
I	I	58	低線量被爆が続くことで、将来、子どもたちの健康にどのような影響があるのか心配です。何かしら影響はあっても、国は原発事故との因果関係は認めないだろうというあきらめの気持ちもあります。原発事故後に生まれた子どもの健康状態が気になります。(2018-521)
II	J	59	今現在、表向きは元気に生活している様にみえるが、20年、30年後に結婚、子供…っと言う話になるときが来たら、もし、相手の方が現在の福島と関係のうすい方だった時、将来生まれてくる子供の事を考えて、相手方のご両親に反対されないだろうか?あの時、実家にもっと避難しているべきだったのでは?っと言う思いが少しはあります。それでも今を元気に生きなければ…っと思えます。(2013-236)
II	J	59	娘は福島から将来県外へは進学、嫁には行かせません。いつか、嫌な思いをするかと思ったら、せつないです。もし、子供を産んで障害があったりしたら、絶対そのせいだと言われるでしょう。相手の両親とかに。だから福島で結婚して、一生福島で生きていくしかないんです。世界で有名な FUKUSHIMA なんですから…。(2014-1017)
II	J	59	子供達が将来進学や仕事で県外に出た時、福島県出身であるということだけで、差別やいじめ等にあつたら悲しいし、つらいなと思ったり、考えたりすることがよくあります。又、結婚や出産、子育て等、子供達が将来幸せに生活できる環境がどのくらい整えられているのか心配です。(2015-144)

II	J	60	放射能のことをもっと知ろうとネットを見ると、「福島は死の土地」「数年後には新聞のお悔み情報の欄は子供の名前がいっぱい載るだろう」「福島の子供、いつまでも被害者面するな」「福島に住んでいる子供は病気で死ぬか大人になっても結婚できない、子供を産めない」などといった書き込みが沢山あり、怒りと共にもっと不安な気持ちでいっぱいになりました。もし、自分の子供が死んでしまったらどうしよう…日が経つにつれて不安は大きくなり、夜もあまり眠れず、いつも放射能のことや子供のことを気にして気分が落ち込み、素直に笑えない自分がいます。(2013-250)
II	J	60	福島のものとは…と言われ、私達も、引け目を感じ、私達は被害者のはずなのに加害者扱いになっているのはなぜなのでしょう？私達は、一生のがれる事は出来ません。子供達が将来何事もなく生きていけるのか心配でたまりません。親の責任でこうなった訳ではないのにごめんね、と謝る親ってなんなんなのでしょうか？(2014-571)
II	J	60	一番はニュースや風評で「ひどい環境で暮らしている人々」のような扱いを受けることが、とても悲しく、憤りを感じる場所です。世界の放射線の数値を見ると、現在の我々よりもずっと高い環境でずっと昔から暮らしている人達がたくさんいると思います。その人たちは体に害はあったのでしょうか？ですので、もっとポジティブに世の中の人たちが考えるようになればいいなと思っています。その風評が将来の子供たちに悪影響にならないことをただ祈るばかりです。(2015-38)
II	J	61	福島ナンバーを見た関東の人が、「放射能が移る！！」と捨てぜりふを言われ、すごく不愉快な思いをして、出かけるのもそれから嫌になり、こわかったので、今でも他県の人が信じられないし、嫌いです…。(2013-2)
II	J	61	娘達が原発事故後、中学の修学旅行に行きました。新幹線で4月に行くべきものが全てバス移動。2年生の時から考えていたスケジュールが全てという程変更。バス移動のため、見学時間も大幅縮小、宿泊先も断われ、1ヶ所のみ宿泊。遠い所からそこに戻るという。福島ナンバーのバスは危険と、他県ナンバーを手配するかという話まであがりました。たのしみにしていた、もんじゃ焼での昼食も、相手側から断れ行けずじまい。卒業式での答辞で、楽しみにしていた修学旅行で、入ったおみやげやさんに、どこから来たの？と聞かれ胸を張って、福島です、と言う事が出来なかった。なぜ私達がこんな思いをするのでしょうか？と言った言葉が1年経とうとしているのに忘れる事が出来ません。今でさえ、あから様な態度を取られる事はなくなりましたが、宿泊先を、予約する時に、福島からですけど受入れてもらえますか、と聞いて予約する悲しさ、私でさえ、忘れられない。(2013-1574)

II	J	61	私のいところが大学で県外へ行き、アルバイトの面接へ行き、合格していました。しかし、周りの人から福島県の人とは接したくないと言われ、雇用解除になりました。結局きちんとした情報が行き届いていないのが現状なんです。これからの子供達が成長し、結婚や就職や出産などで、このような状況になりうることもあると思います。直接的な原因が違っていても、福島県外の人たちには伝わらないかもしれない。そういった不安もあります。現状の生活に不便などはあまりありませんが、将来への不安と補償をしっかりとっていただきたいと願います。(2014-414)
II	J	61	先日、友人から結婚が決まっていたのに福島出身ということで破談になった方の話を聞きました。自分の子供が結婚するのはまだ20年位先だと思います。その頃には県外の人からすれば原発事故の事は忘れられているか、今よりもっと他人事になってしまっていると思います。ですが、自分の子供の結婚相手が福島出身と知ったら、忘れていた原発事故の事を急に思いだし、偏見の目で我が子が見られるのではないかと多少なりとも不安があります。(2015-416)
II	J	61	震災から5年が経ちようやく福島で生活していくしかないと思い始めた折に、熊本の震災がありました。同じ被災者として、できる限りの事をしたいと重い、協力いたしました。そこで、「福島の水を送ってよこすのは、被曝者を上げるつもりか」や「汚染水はいらぬ」等の話を聞き、とてもショックでした。他県の人からすれば、福島はバイ菌扱いされる存在なのだ悲しい気持ちになりました。子供が大きくなり県外に出た時にどのように接されるのか心配です。(2017-631)
II	J	62	最近、中学生などのいじめのニュースをよく見ます。直後ではないのに「あの人は福島から来た人だ」という理由だけでいじめられる。そのニュースを見るたびに胸が苦しくなりますし、事故当時に危惧していた事でもありました。自分の子どもたちに、福島から来た事を隠して生きるように言うことはとてもできません。今後そのようないじめが起こらないよう、国にも対策をとってほしいと思います。私達には何の罪もないのですから。(2017-288)
II	J	62	県外に避難している子供達がいじめを受けている等のニュースをみると不安になります。多分、その子の周囲の大人が子供達の前で福島の影響や賠償金等の話をするため、子供達はその影響をうけいじめに発達するのでしょうか。まだ、福島の子供達をそのような目でみている大人、その子供達がいる限り、将来の子供たちが差別を受けるのではないかと、不安が消えません。人の考えは、それぞれなのでなんとも言えませんが。(2017-410)
II	J	62	震災で避難した子どもたちが、日本各地でいじめの被害にあっていたことに心が痛みます。福島県民にはなんの罪もないのに…。怒りを通りこし虚しさを感じます。福島県の子どもたちが胸をはって生きていける社会にしてほしいです。(2017-687)

II	J	63	これからも長い間、広島の人たちがうけた屈辱を同じように味わうのかもしれませんが。子どもたちがのびのびと生活できる日は本当に来るのか。福島に生まれ育った自分は福島を誇りに思ってきました。でも今は違います。福島であることをかくそうとします。(2013-1065)
II	J	63	東京など行った時に、「フクシマ」という言葉をかくそうといしている自分がある。「フクシマから来た」ことで、他の人に嫌な目で見られることが嫌だからだと思う。また、震災後、「福島ナンバーの車」でイタズラや嫌がらせをされた方がいるので、そういうものもこわいと思っている。(2015-697)
II	J	63	キャンプで関東へ行く機会が増え、あちこちの方に会うが、福島だから…接する人はいないので、有り難いと思いつつ、こちらの料理などをふるまう時、自分の中で「大丈夫かな?」と不安になって、引け目を感じるのが嫌だなと思った。(2015-1021)
II	J	64	最近、夫が県内に単身赴任をする事になったのですが、今後もし県外に転勤する事になり、家族で引越しするとなった場合、その引越した先で福島から来たという事で子供がいじめにあったら…などと考えるようになってしまいました。あれからもう5年ですが、悩みが尽きないのが、切ないです。(2015-690)
II	J	64	6年経つと言っても、原発が治まることは無さそうなので、県外に引越すか、いまだに悩んでいます。しかし、ニュースで子ども達が学校の先生や友達から原発のことでいじめられているのを見ると、避難したからといって、安心に暮らせるわけでもなさそうで、悩みはつきません。(2017-31)
II	J	64	この福島で生活している限りは特に心配となること、ストレスを感じることはなくなってきましたが、福島ナンバーの車で県外に出かけることに、少々ストレスを感じる場所は正直あります。県外の方がどう思っているかは分かりませんが、偏見は必ずあると思っています。今後、先々のそんな不安はあります。自分たちはいいのですが、子どもたちが大人になった時にどんな風評被害に遭遇するのが心配ですね。(2018-683)
II	J	65	原発事故のことはあまり気にしていないが避難している人の補償がいつまで続くのか。1円ももらっていない私達が、県外の人からみて同じくお金をもらっているなどとは思われたくない。(2015-1110)
II	J	65	私のアパートの周囲には浜通りからの避難している方が多くいるように感じます(車のナンバーなどから)とても経済的に余裕があるようにみえて正直うらやましいと思っています。1人10万円の補償は働かなくても生活できるのでクタクタになって働いている身としては腹が立ちますし、中通りからいなくなってほしい。同じ県民とは思えません。嫌いです。福島県民として皆一緒、ひとくくりとして扱ってほしくありません。(2015-1165)

Ⅲ	K	66	前までなら、庭で思いっきり遊び、どろんこ遊びも当たり前でできていたのに、今は、雨どいの下や土にさわるだけで"ダメッ"と大きい声を出してしまいます。主人の実家が県外なので帰省の際に広い公園で遊ばせていると、砂場で子供が"さわってダメ?"と聞くのです。公園に砂場があるのは、そこで遊べるからなのに、福島の子供たちは本当に当たり前の事を奪われてしまったのだと胸が痛くなります。(2013-70)
Ⅲ	K	66	夫が店の側まで車をもってきてくれるのを店の軒下で待っていたとき、軒下から落ちてくる雨を娘がすすってなめました。その行為を見て私は「ダメ」とたがいて、怒ってしまいました。娘は何がダメなのかわかっていなかったようです。今まではこんなことで怒ったりしていなかったのに…と生活の変化に悲しくなり涙がこぼれました。(2013-351)
Ⅲ	K	66	私には、小さい子供が5人います。原発事故後から、外であそばせるのをやめさせています。子供達には「どうして?」「何で?」と、なきながら言われ、それに対してどなりながら毎日のように怒っています。心の中で「ごめんね」と…。そんな子供達の姿を見ると、涙が出ます。(2013-1779)
Ⅲ	K	67	事故前だったら、石を拾ったり、おもいっきり砂遊びをしたり、お散歩など当たり前の事が、事故後にはすっかり出来なくなり、子供はストレスを感じている様です。(2013-103)
Ⅲ	K	67	子供は敏感です。原発事故前までは普通に外遊びをしていたのに、事故後、1ヶ月以上もの間家から出ることのない生活でした。私は理解できなくとも全て子供に話し、外では遊べない事も"ごめんね"と伝えました。それまで外で遊びたいと言っていた子供も、今では「外は危ないから中に入ろう」と下の子を誘ってくれるようになりました。外遊びをしない事が、どれほどストレスがたまるのか、心、体の発達に影響があるのではないかと、随分悩みました。(2013-81)
Ⅲ	K	67	子どもは、自転車のり、縄跳びなど、外で元気に体を動かしたい時期であるのに、時間を制限せざるをえず、室内では十分に満足できず、少しのことでイライラすることが増えた。(2015-182)
Ⅲ	K	68	子どもが外で草花、石、雪を触さわった時、「さわってはダメだよ!」と声をかけます。子どもが「ほうしゃのうだから?」と聞きかえすのを聞くたびに3才児の子どもが覚えるべき言葉なのだろうか…3才児が話す言葉が、放射能や線量計でいいのだろうか…と思い、心が痛くなります。(2013-807)
Ⅲ	K	68	4才の息子が去年の雪が降った日に「放射能なくなったら遊んでいい」と言われた時に、福島じゃムリだし、涙が出ました。(2013-2036)
Ⅲ	K	68	子どもが虫をみつけたり、花をとろうとした時に「とってもいいの?」ときくことはとても不自然。「ここは悪い空気?」と子どもが震災後によく言っていた。あまり私自身、神経質にはならないように気をつけてはいたが、直接手にとるのは…NGとしてしまう…。(2013-2598)
Ⅲ	K	69	外で遊ぶ事が少なくなり、子どもも私もストレスがたまっています。お家の中では、おもいっきり遊ぶ事もさわぐこともできず、よけいにグズグズしているようにおもいます。(2013-217)

Ⅲ	K	69	原発事故後から外で遊ぶ時に場所をえらぶようになりましたが、私自身車が無い為、なかなか外に出してあげられないのが現状で、子供達も私もストレスがたまるのが、気がかりです。(2013-1426)
Ⅲ	K	69	外であそびたいとおもえなくて、子どもも私もストレスがたまりイライラしてしまう。(2013-1544)
Ⅲ	K	70	子供が水たまりに入るとつい怒ってしまう。(2013-325)
Ⅲ	K	70	今は落ちつきましたが、外へ出ると、土にはさわらないようガミガミしています。なので、外遊びはほとんどしません。(2013-1404)
Ⅲ	K	70	男の子だから、田舎だし、どろんこになって遊んでほしいと私が小さい頃のように同じく庭で遊んで色々な経験体験をして成長してほしいと願っていた矢先にこのような事態になり、土を掘ろうとしたり、石をひろって投げたり、草をつんだり自然にふれるたび思わず「やめなさい！」と止めてしまう。そんなことでなんでしからなくちゃいけないだろう…子どももどうして？おこられるんだろう…とても切なくなりました。(2013-1260)
Ⅲ	K	71	原発後、外では遊べなくなりました。子供には外にはバイキンがいるから遊べないの！と言って聞かせました。(当時2才) マスクも出来るだけさせました。苦痛だったと思います。自分も、家に居る事が多くなりイライラして子供にあたってしまう事が、毎日反省していました。(2013-890)
Ⅲ	K	71	常にイライラしてこどもにあたってしまう時もあり、自分がいやになります。(2016-671)
Ⅲ	K	72	雪を見れば、子供たちは遊びたいだろうけれど、遊ばせるのに、何の不安もないはずが無く、雪遊び、外遊びが制限され、子供への説明にも困ります。子供は「毒なの？」と聞いてきます。(2013-531)
Ⅲ	K	72	子どもに「公園で遊びたい」と言われると、何と言ってやめさせていいのか難しい。(2013-304)
Ⅲ	K	73	子供は「何でふれてはいけないのか」分からず、話をしても納得できません。目に見えて汚染されているのであればわかりますが、それもなく子供にわかってもらうのはとてもむずかしいことです。(2013-1547)
Ⅲ	K	73	事故前よりも、外出の時間が大幅に減ってしまった事がとても心配です。一度遊びに出た子供達に、短時間で「家に入りなさい」と言うのは本当にかわいそうです。説明してもやはりきちんと理解できないので、子供達にも相当ストレスになっていると思います。(2013-2038)
Ⅲ	K	74	子供が成長するにつれ外遊びをするようになったり、道路にすわったり、道端の草花を摘んだりするようになりました。体の影響が心配ですがそれ以上にそれを止めさせることでの子供の精神的影響が心配でみてみないふりしている自分がイヤになることがあります。(2013-1278)
Ⅲ	K	74	親としてはなるべく外にだしたくない。だけど他の子どもたちがそとであそんでいると「ダメ」と言えない。(2013-2079)

Ⅲ	K	75	原発事故がおきてから子供を外に出すのがイヤになりました。少し外に出て落ちている石や砂、雪をさわられるのもイヤ…全てにおいて神経質になりました。外で遊べない子供はもっとストレスを感じていると思う。姉弟ゲンカが多くなりました。(2013-526)
Ⅲ	K	76	運動が苦手なのは、震災後外遊びをさせなかったせいなのかと思ってしまうと、母親として、子供に申し訳ない気持ちになってしまう。(2014-13)
Ⅲ	K	77	子ども達は普通に外で遊びたがります。でも直接砂や土に触ったりするので注意しますが、震災後からずっと言っているのに、子ども達も言われる事に慣れてしまっただけ？言う事を聞いてくれない時があります。(2014-676)
Ⅲ	K	78	外遊びの時間が全く無い子供の生活スタイルに不安を感じます。歩きや、自転車で行ける距離でも、車で送ってほしいと言うクセがついてしまいました。外で遊んだらと言っても、「イヤダ」と答えるので、体力や、身体の成長に悪影響の生活をしていると考えてしまいます。心配したり、イライラしたり、このところ母親として気持ちが不安定です。(2015-36)
Ⅲ	K	79	外遊びをしても子どもたちが土にさわると不安を感じたり、イライラしてしまうことがあります。このようなふつうのことにも過剰に反応してしまうことは子育てによくないと思ってもやはり心配です。(2016-34)
Ⅲ	L	80	福島県産の物を食べなくなった。「大丈夫だから…」と米や野菜を持って来る義父との対立。(2013-325)
Ⅲ	L	80	去年の春に裏の山でとれた竹の子を義父が採ってきてくれた。一緒に同居しているので「食べたくない。食べさせたくない」とは言えない。自分達、孫達に食べさせたいと採ってきてくれるのは嬉しいが口にして良いものなのか不安になる。一度こういう内容で義母とケンカではないが意見の違いが震災後にあった。私の子供に思う気持ちが、平気で外の野菜を口にしない義父母が許せなかった。(2014-331)
Ⅲ	L	80	放射能汚染に関して理解があると思っていた主人の両親が徐々に変わって来ました。検査をしていない自家製野菜、海釣りの魚を(最近になっては)子供に食べさせようとしています。数年後に同居する予定なのですが、汚染対策の理解を得られないのであれば同居しない方向に話を進めたいのですが…現状に慣れてしまった人達が子供の安全を考えない様になって来たことに危機感を覚えます。主人方親戚に関しては自宅のある避難地域でとったきのこを食べさせようとしたこともあります。(2014-830)
Ⅲ	L	80	親戚が、作った野菜などを渡されると、夫の親戚をむげにも出来ず、いままでだったら喜んでもらっていた野菜がストレスに感じます。(2015-769)
Ⅲ	L	80	県産物や関東の食材は子供に食べさせないと言いつつあるにもかかわらず、同居している義母はそれらの食材を子供に食べさせていたり、私達にもってくるため、考え方の違いからストレスで仕方ありません。(2015-913)

Ⅲ	L	81	放射能が安全かそうでないか、夫と夫の両親との認識のズレがあり、とてもつらかった。(2013-2057)
Ⅲ	L	81	家族内の放射能に対する考えが直後→半年後→1年→現在とだんだんズレを感じストレスになっています。又、スーパーなどで食材えらびに苦勞し、家族にどこのやつだ?と言われ、福島県産のしかなかった時の重圧感、とても苦しくにげだしたいです。(2013-505)
Ⅲ	L	81	私達、親の考えと、夫の親と子育て、放射能に対する考えが全然ちがいで、すごく困る。子供の前で避難している人のことを悪く言ったりするのもどうかと私は思う。(2014-5)
Ⅲ	L	82	以前、夫と避難するしないでけんかになりました。小学校に入ったばかりの上の子のことを考えると環境変化にともなうストレスを考えて避難できないという意見に「母親失格」といわれました。今でもその考えのちがいは平行線のままです。夫婦仲もあまりうまくいなくなり、子どもたちにストレスを与えてしまっています。どこにも自分の気持ちを話すことができず、毎日つらく死にたいと思っています。(2013-210)
Ⅲ	L	82	原発事故直後は、私の考えと夫の考え、義両親の考え方の違いに悩みました。個人事業をしていたので、避難はできませんでした。小さい子どもだけでも、事故直後に県外等に預けられたら…と後悔しました。主人や義父母等は、事故直後、あまり気にしていなかったようで、私に対して、過剰に反応しすぎだと言われて、私自身、とてもショックを受けた記憶があります。(2013-1696)
Ⅲ	L	83	住所を移すには、夫が同意してくれず、理由は、移したら放射能関連の検査が打ち切られてしまう不安があるからだそうです。せめて避難先での福祉も、同じように受けたいですどこに問い合わせが良いのかわかりません!! 追いつめられて、問い合わせる事さえも辛いのです。他人に否定されるのが、怖いのであまり、社会とつながるのも出来ないでいます。親戚や自分の親も、福島にいない事で責め立てる電話をしてくる始末です。(2013-1790)
Ⅲ	L	83	自分の両親、夫の両親からは色々言われるので(「家族は一緒に住むべきだ!」というようなことを…) 私にとっては、それが最大のストレスです。両親。義両親は、別居していることで私達夫婦の関係や父と子の関係が悪化することを心配してくれているのだと思います。しかしそのことで私は自分の親に悩みを相談しなくなりました。何を言っても「家族一緒に暮らさないからだ」という答えが返ってくるからです。(2015-708)
Ⅲ	L	84	私は直後から不安や心配がなくなり、できれば子ども達を安全な地域に避難させたいと思いながら生活しています。地域の中、家庭の中でさえ温度差があり、苦しい思いで生活しています。(2013-2228)
Ⅲ	L	84	福島にいと皆段々気にしなくなっていて、自分だけが気にしすぎているのかと不安になります。夫もこの地から離れる気はなく、避難するなら離婚すると言われており、避難ができずに今に至ります。(2013-2459)

Ⅲ	L	85	親せきに原発のことで避難生活をし、兄弟に世話になりっぱなしで、私の家にもしょっちゅう泊まりに来る人がいます。とても迷惑しています。いつまでも犠牲者のふりをして親切な人達にぶら下がって生きていく県民にはなりたくないです。(2013-746)
Ⅲ	L	85	親戚の人で、避難地域に住んでいるので、仮設生活をしている人がいます。しょっちゅう我が家に泊まりに来て、長居をし、年末年始は親せき中の家をはしごしてなかなか自宅(仮設)に帰らないという生活を震災前から続けていて、正直みんなあきれています。人づきあいもよく、手がかかるタイプではないので、だれとでもうまくやっている人なのですが、毎日来る度に話すことといえば、原発の補償問題で、弁護士との打ち合わせや講演会、デモ、など人の集まる所には必ず参加して持論を展開し、繰り返し同じような話を延々と主人とやっています。私としては正直バカバカしく、「どんだけヒマなの!？」と言ってやりたいです。その人は月に1回以上は旅行に行っていて、充実しているようですが、結局は人恋しさが募って毎回泊まりに来ているようです。(2016-123)
Ⅲ	L	86	今現在高知県に避難しています。夫とは考え方のちがいで離婚に向けて話がすすんでいます。(2013-608)
Ⅲ	L	87	主人とも週末にしかあえず、あまりうまくいってません。同じような家庭がたくさんあると思います。もっと一家で避難を支援してくれると助かります。(2013-724)
Ⅲ	L	88	パパは転勤のない仕事です。あまり今後のことについても考えてないようで、電話で毎晩話してはいますが、そういう話題になると暗くなるし、疲れてるだろうからとあまり言い出せません。いつも1人で考えているかんじです。(2013-725)
Ⅲ	L	89	家族(夫、夫の母親)から、避難しろ(子供2人と私だけで…)仕事をやめろ、パートならいくらでもある…精神的に辛かったです。職場では管理職(副主任)、責任ある立場にあり…、人が少ない中(産休・育休だった)迷惑をかけ、職場の人で避難している人はいないのにと、毎日葛藤があり泣いていました。子供も守りたい。でも家族がバラバラになり知らない土地で数ヶ月の子供と2才の子供をつれて1人で育てる自信はありませんでした。(2013-1856)
Ⅲ	L	90	私は避難しないことを親せき中に非難され、未だに子供達がかわいそうと言ってくる。現在私が、妊娠していることも言っていない。主人とも意見の相違があり、妊娠のことについては何も話していない。妊娠していることだけは知っているが、言い争いを避けたい(主人は処置を求めている)ので、子供達にもまだ話していない。現在6ヶ月。もう処置できない時期にあるので、そろそろ性別の事を交えて話そうかとも思っている。(2014-298)

Ⅲ	L	91	やはり放射能についての両親、夫との考え方のずれは埋まりません。2人目出産の時、一時的に県外へ行ったりもしましたがあまり良く思われず、「気にしすぎ」との事でした。その事が産後うつのような症状をより強くさせて自分自身の体重の急激な減少、抜け毛など体調に表れたりもしました。その時のことはずっと忘れられません。子供の事を考えての行動を非難されてものすごく傷つきました。(2014-909)
Ⅲ	L	92	昨年3月夫方両親が避難先から自宅に戻ってしまった。自宅付近にあるガイガーカウンターを見ると、0.4 μ sv 以上ある。少し外れるともっと高い地域も。祖父母は会いに来てほしい様だが、子供のことを考えると連れて行きたくない、というのが本心。他の親せきは孫のことを考え移住したのに、と考えてしまう。夫が長男なので、将来戻って来いと義父が言い出しかねないので不安。昨年、義両親が自宅に戻ってしまったあたりからストレスで私は体調不良、精神不安定に。曾祖父母の為にも自宅に戻った義両親を考えると何も言えず。理不尽にふるさとを追われた事を思うと、夫方のストレスを感じ何も言えない。除染が済んだと言うことで畑で野菜を作り始めた。曾祖父はきちんと検査をして、大丈夫だったよと結果を見せてくれた。しかしきのこや山菜を採ってきてしまうので、義父母は困っている様子。我が子と従兄弟二人の為にひかえてもらえないかな、と思うが長年村で過ごして来て、日常をうばわれた曾祖父母の気持ちを思うと言葉が出ない。安全な場所に引っ越してくれたら会いに行けるのに、と思う。(2018-765)
Ⅲ	L	93	今回の事故で、今まで普通につき合っていた人達の本心というか…心の内を知り、人間に絶望しました。何もしてくれない県や市町村、町内会…引越しをして連絡が途絶えた友人…自分達だけ(自分の両親と)コソコソと避難した義妹…。放射能に対して敏感すぎると叱咤する両親…震災当日のライフラインが全く遮断された状態で仙台まで迎えに来よう言う義父…。ある意味、この震災、原発事故で人の本性を知ることが出来、付き合い方を考える事ができて良かったとすら思えます。(2013-339)
Ⅲ	L	94	どうしても義父や義母は原発の危険なことを理解してくれないので相談しにくい状況です。年上の方の理解をえるために色々な情報を…。(2013-613)
Ⅲ	L	95	姑が自分で作った野菜や米を食べたがっているの、いつもケンカになる。(※近所はみんな自家野菜を食べている)姑とはもともとあまりうまくはいってなかったが、原発事故から、ますます価値感のちがいがいなどから口ゲンカが多くなった。家庭内の空気も悪く、その事で子供たちに影響がないか心配。(2015-356)

III	L	96	私の両親は放射能に対してはあまり深く考えていないので、子供と外であそんだり、自宅でとれた野菜や果物を食べさせたりしていました。私は、孫と一緒にあそんでくれるのもありがたいし、自分が作った作物を食べてもらいたい気持ちも良く分かるので言いにくかったのですが、何度も「外には出さないで」「地元産のものは食べさせないで」「何のために避難しているか分からなくなる」と言ったり、自分でおかずを作って持っていったり、室内で遊べるおもちゃを買ったりしていました。私も、子供をむかえに行くときは、子供が「イヤだ、アパートに帰りたくない」と泣くので、自分の行動がまちがっているのか？とても悪い事をしている気分で一緒に泣いて帰る事がほとんどでした。実家からアパートまで一度も泣きやまなかった事も何度もありました。(約2時間半ぐらいです)。(2015-679)
III	L	97	家族の間でも原発の考え方、今の環境に対しての考え方に、温度差があり、話をしても一方通行です。まわりの方も、「もう気にしてない」などと言われると、もう話もできないので、私の中では、放射能は禁句となっています。(2015-894)
III	L	98	今も両親は避難生活を続け日々の不安でいっぱいです。私のことを助けてくれた両親へ私は何もしてあげられることはありません。ちょっとでも子育てがくるしくても助けてくださいとは簡単に言えません。5年親も年をとってしまい応援するって何も応援できません。ただ自分は自分の子どもと日々を大切に過ごしていくそれしかできません。この温度差をなくすことはとてもとてもむずかしいと感じる日々です。(2016-411)
III	L	99	夫がいない為、子供の事を思って実母と同居しました。5年前65才の母は、自分の人生を子守りで終わらせたくないとか家を出をし、1年と少しになります。不明です。心理的に井戸水を飲みたくなくなったり、(ペットボトルを買うようになった)住宅の除染にお金を使ったりした事で、イライラがつのり、子守りをする事が苦痛になったのではないかと思います。私が先に【もう死にたい】と言うと、孫はじゃまだから、三人殺してから死ねと言われました。普通ではないと思います。(2016-490)
IV	M	100	まわりにもう事故の不安を語る人はなく、そんなことを口にする人は"少し変わった人"と思われなにか不安で誰にも話していません。皆も同じ気持ちで、さぐりさぐりなのかもしれません…。(2018-509)
IV	M	100	福島では震災後から本当に苦しんでいる母親たちがたくさんいると思います。私もその1人です。ですが、その一方で「もう昔の事、そんなに考えてもしょうがない」と放射能の事を話すことすら嫌がる母親たちもいます。その考え方の違いは本当に今まで築いてきた親子関係、友人関係をこわしていきました。今までは私のような考え方をしている人はジャマ者扱いされているようです。(2013-84)
IV	M	100	母子のみで、震災後の6月末に仙台に自主避難してきました。今まで住んでいた場所には友人も残っているし愛着もあるのですが、やはり避難した人、しない人では、間に見えない大きなカベが存在しているような気がします。お互い子どものことを考えていても、微妙に意識のズレなどあって、分かれてしまっていると思い悲しくなる時もあります。(2013-1554)

IV	M	100	他の人とは、温度差があり、すべて本音で話せることはありません。あの日から、心から笑った日はありません。これが現実だと思います。(2013-319)
IV	M	101	浜通りから、自分が住んでいる大玉村に、引越しをして、こっちで家を建てる人が何人もいます。その人達に、土地を売ってほしいと頼まれたり、アパートに入居している人達も、たくさんいて、原発事故後、大玉村に転居してきた人達との付き合いが難しいと感ずることがあります。(2016-285)
IV	M	101	福島市の人間は浜通りから避難してきた人間を歓迎していない人が多いです。むしろ出て行ってほしいぐらいです。(2017-329)
IV	M	101	浜通りから避難している人達が旅をしたり、共働きでもないのに幼稚園の二部保育を利用しているのを見ると、やり切れなさを強く感じる。ガマンするしかないけれど…。あーまたその人とのつき合いが始まる…。(2017-651)
IV	M	102	子供達をおもいした行動が、うしろ指さされるような、環境、事故直後は、毎日毎日不安でしかたありませんでした。・・・何ヶ月かすぎ、避難先では、ごく一部の人のせいで、「福島の間は…」と避難をうけたり、毎日のようにきたない、かえれとはり紙をされる母子や、色々話をききました。私はそういったことはありませんでしたが、やはり、福島からきたと言うのは、すんなり言えませんでした。母子だけで自主避難する人が多く、子供は不安定=泣く=うるさいと苦情。お母さん達は毎日必死でしたよ。福島であそばせてあげられないぶん、外で遊ばせてあげたいと思うのはふつうなのに、「毎日、福島の親子はたのしそくに金ももらってあそんでる」と言われた方もいるそうです。その時、私達は一切お金などももらってないし、自分のお金で避難していたのですがね。そんな話をきくと、くやしい気持ちと、何も伝わらない、メディアは、いいところしかうつさない、もどかしさで心がおかしくなりそうでした。福島にのこった人の心の苦しさ、でていった人の心の苦しさ、本当に国も東電も何もわかってない。福島にのこると私はきめました。子供が山形の小学校へ入学しましたが、毎日、福島にかえりたい、父親、みんなのいる場所へかえりたいと毎日、泣きながらうったえてくる娘をみていると私まで泣く日々。それをみて、動揺する弟達の顔。娘が、「お外であそべなくても、がまんしますから、なんでも、気をつけてくらすから、かえろよ。」と1年生の子供が泣いてうったえる姿を、東電のバカどもにみせてやりたかったです。(2013-1093)
IV	M	102	まだまだこの地で新しく出会う人たちはいる。会話で出身は？となる。そして必ず何年になる？と聞く。この地で生まれ育った人たちは必ず、私の出身を聞くと一瞬止まる。厄介者を受け入れた気持ちもあるのだろうか。この地へ、他の地から何らかの縁で来ている人からは、感じない。私の思い過ごしだろうか。やはり避難してこの地にいるとは思われない。(2018-4)
IV	M	102	4月に引越してきて、福島に住んでいた事を伝えると震災の事が話題になり、少しひかれる事がありました。(2018-138)

IV	M	103	今、避難していた知人達が少しずつ福島に戻って来るようになってきました。自分の価値観を、他の人におしつけるように、「なぜ、避難しない？子供のことで考えている？」と言い放って出て行き、何事もなかったかのように戻り、接する知人にどのように接して良いのか分かりません。(2013-1857)
IV	M	103	避難して帰って来た人と接するときは、やはり、少し気をつけて、話します。地元の野菜とかあげる時とかあげない方がいいか…とか。(2015-37)
IV	M	104	「まだ避難しているんだー」という周りの目も気になり、もう原発原発と騒ぐ人もそれほどいないし、福島に住むには自分だけブーブー言う訳にもいかないなあと思っているところです。みんな普通に外で遊んでいるのに、福島県産のものを食べているのに、ダメとも言えないし…。戻ったらそういうストレスが貯まりそうです…。(2013-768)
IV	M	105	現に友人でも、放射能の影響に過敏で、東電・国・市に対して常にうらみつらみを言っている人がいて、一緒にいると嫌な気持ちになってきて、距離を置きたいと思ってしまう。(2013-1205)
IV	M	105	ママ同志のねたみやひがみなども見聞き、それもつらいです。(2013-2210)
IV	M	106	近所で子供同士仲良くしていた2つの家族がまだ帰福せず。戻ってきてもどのように接したらいいのか…不安。福島にとどまったことをどう思ってるのか。ダメな母親だと思われるのではないかと、被害的に考えてしまう。(2013-1370)
IV	M	107	1番心苦しかったのは、周りのお母さん達との考え方がちがう時、子供がその事で友達に何か言われたり(どうしてカゼじゃないのにマスクしてんの？等)した時でした。集団生活の中での大変さがありました。(2013-1847)
IV	M	108	お隣さんは山形に避難していて、まだ戻る予定がないというのが少しさみしいです。(2014-450)
IV	M	109	私の実家のある秋田に、母子で2年間避難しました。その頃は、所属感がなく、この先どうなるのか…不安だらけでした。福島に戻ると決めた時も、近所の人から(親として失格だ!)等、散々言われ…どうしているか悩んだこともありました。(2015-803)
IV	M	110	保育所が閉鎖され、知り合いがだれもない核家族である中で、職場から、「みんな出てきて働いている、なぜでてこないのか。」と言われ、かなりつらい思いをした。「子どもが預けられない」と説明しても、「子どもを理由にするな。」と言われた。ガソリンのない中、なんとか親元へ子どもを送り、職場へ行くと、全員から無視された。本当につらくて、パニック障害になってしまった。本当に苦しかったし、今でもそのつらい気持ちがいまだ出されると、呼吸が苦しくなり、発作が起きる。まだ、母乳を飲んでた子どもと離れ、つらくて泣いていたが、ガソリンがなくて会いに行くことができなかった。非協力的な職場と、子どもと離れたことが本当につらかった。未だに、許せない。きちんと責任をとってほしい。家のローンもあるし、引越したくても、できない。(2013-2202)

IV	N	111	避難区域の人の一部は大量に出たお金で高級車を次々に買い替え。仕事もしない。家もテレビで言ってるほど苦労していない。こっちは仕事が変わったり一時避難で大金がかかったり、家が住めなくなったから家を買ったりと。もらった補償金はすぐに無くなり事故時の借金は残り残ったまま。5年たった今でも自由にあそび暮らす人を見ていると全てがばからしくなる。5年たとうが放射能はふりつづけてるし風評もあるし。この差は何なんだろうと思う。(2016-774)
IV	N	111	双葉、大熊、富岡、楢原、この4町が、原発を賛成して持ってきたのだから、苦しんで当然と私は思います。なのに、毎月多額のお金が入り、仕事もせず、パチンコ、外食、遊び放題…マナーは悪いし、同じ福島県民でなんなの？ 私たちはあなたたちのおかげで、補償も無いし、子供達は自由を奪われ…国・県・市・政治家、分かっているのか！！と言いたいです。(2014-362)
IV	N	111	避難している人は東電から1人月に10万もらっています。(子供でも年寄りでもです。)仕事もせず、夜は飲み歩き、やりたい放題です。そんな親ですから子供も学校では、やりたい放題です。先生が親に言っても、「避難してきているのだから」と言います。教育委員会も何も言えません。避難者がたくさん行っている学校には行きたくないと、別の学校に行く子供もいます。避難場所に家をたてる人もいますが住民票は絶対にかえません。元の住所のままです。なぜなら住所をかえてしまうとお金がもらえなくなるからです。買い物に行っても平気で車いす専用の駐車場に止めます。本当にお金って人をかえるのだなあ実感しています。福島でそのまま住んでいる人と、避難して仮設に住んでいる人の考え方は全然ちがいます。だから避難者を「かわいそうだ、大変だね」と思う人はいないと思います。TVでは大変そうな人を映しますが、やりたい放題の人もいるという事を全国に知ってもらいたいです。避難していない私達が一番の被害者です。一緒に所に住んでいるのも嫌です。見るだけでがっかりします。(2016-722)
IV	N	112	仮設の人達はそれなりの補償を東電からしてもらっています。なので生活はすごく金銭面で苦労してはいないので。今は、買い物に行っても大いばりって感じで、平気で車いすの駐車場に止めたりします。すでに金にまひしている感じです。働いていない人がたくさんです。TVではかわいそうな映像とかが写りますが、それはごく一部の人達だと思います。本当に仮設がある事ですごく嫌な思いをする事が多いです。やっぱりお金をもってしまおうと人って変わるんだなあと思います。(2015-687)
IV	N	112	近所に引越して来た方は、賠償金もらって海外行ったり、パチンコ行ったり、車買ったりと、不公平さを感じる。中には本当に戻りたくて大変な人もいるだろうけど、金銭面に余裕も出来、元々その町から出るつもりだったから、助かったとか言ってる言葉を友人から聞いた時とても腹が立った。(2014-1518)

IV	N	112	私の知人は、浪江町ですが仕事関係で知り合った女性ですが、ディズニーランドに行ったとか、ブランドバッグを買ったとか、海外ハワイで原発で毎月もらった賠償金でぜいたくしていますとメールがありとても腹立ちました。原発でお金をもらっているからと言って嬉しそうに話すのはどうかな?と思いました。(2015-62)
IV	N	113	毎月定額の金額が入るが、働かず、パチンコをやったり、毎日外食や子供にはブランド服、お金が人をダメにします。国も帰れないなら、帰れないと打ち出し、これからの生活を考えるようにした方がイイと思う。賠償を受けてる世帯の子供の将来が怖い。(金銭感覚) (2015-736)
IV	N	113	原発の避難者たちに、そろそろ税金や医療費を支払っていただきたい。(2017-145)
IV	N	113	仕事柄、相双地区から避難している方とかかわる機会がある。今も医療費がかからず、病院を受診しているのをみると、そろそろ医療費くらいは自己負担でいいのでは…とってしまう。(2018-202)
IV	N	113	未だに医療費などがかからない人も多く、そういった人はGE医薬品などを使うことを拒否する。補償金もいつまでももらい大きな土地を購入し、大きな家にすんでいるのに…。見ているだけでガッカリする。年金で生活しているお年よりなどの方が、GEに変更したりあまっている薬の調整をしたりするのに、医療費負担がない人は平気で「のこっている分は処分するからいい」とか言う。医療費の窓口負担くらい再開した方がいい。(2018-375)
IV	N	114	気になるのは、避難されてきた方との軋轢ですかね。働かないでブラブラしているとか、よくない話をよく聞きます。実際に見かけますし、逆に避難して転校してきた方から、いやな思いをしたなど聞きます。健康よりも心の被害の方が問題なのでは?と思う事もあります。(2015-766)
IV	N	114	近所で家を3軒も、新車も次から次へと変えてる補償をもらってる方たち…多くいます。ランドセルもったり、医療費もタダなんだと自慢げに言ってきます。そういう方たちが多く引越されてると、近所の方との交流も避けるようになるのだと思います。(2018-587)
IV	N	114	私が暮らす福島市は除染も進み、震災前の暮らしとあまり変わらず、おだやかな日常を過ごしています。しかしながら、避難をして福島市に住んでいる方の中には、東電からのお金でパチンコなどのギャンブルをしたりという何とも切ない状況があり、元々福島市に住んでいる人からすると、地元の人と避難してきた人ということで、見えない壁があるように思います。(2015-1020)

IV	N	115	浜通りから中通りへ避難している人達が、仮設住宅を出て土地を買い家を建てるようになり、震災前から元々住んでいる人達が少なからず、違和感を覚えているような感じがしてきました。あきらかに立派な造りで、聞く話では現金で一括払いで買っているということです。また立派な家ができたと思うとほぼ避難している人の家でまぢがいな程です。これから同じ地域に住むということで今までの壁というか、避難者か、そうでないかというものが（今でさえ気をつけて直接は何も聞けないし、知らないふりをしています。話題には気になっても出せません）あるようでなくなり、どうなっていくのか不安です。(2015-1004)
IV	N	115	私の家の周りには原発で避難した方達が大きな家を建て、近所とトラブルになる事が多くなりました。目につくお金の使い方をしている方もあり自治会の班長をしているので、クレームが多くあがってきます。どうにもできないとわかっていますが、正直うんざりしています。(2016-149)
IV	N	115	避難区域内の人たちは国や電力会社からの補償で、常にお金をもらい、次々と新しい物を買ったり家を建てたりしているが、私たちのように、避難するまでに至らない区域の人たちは、一度や二度の手切れ金で終わり、水を買うお金や目に見えない出費が増え、いろいろな補償もない。地元を離れ、もう戻れないという事については同情するが、今まで電力の恩恵を受けていた人たちに必要以上に国の税金などから支払われているのには納得いかない。やりすぎだと感じています。家族が多い人は1人×〇万円で働かなくてもよいくらいもらえて、1人暮らしの人は生活苦になるほどで貧困の差が生まれ、そのへんがおかしいと思う。(2016-376)
V		116	原発事故により夫の仕事がなくなり、一時期失業中でした。子供は家にパパがいつもいるのを喜んでいましたが、今まで必要のなかった出費があつたりしてお金の心配でイライラ（私が）して、子供にもあつたりしていました。東京電力からお金をもらってもその時だけで（外で遊べないので出かけたりますと）…夫の仕事もみつかりホッとしましたが、社員ではなく…今年も東京電力からもらえますが、だんだん金額はへっていくですね。(2013-174)
V		116	現実生活費。震災前と現在との収入の差は私で10万円程度で47才の年齢でこのギャップをうめていくための手だてを考えるため四苦八苦しています。私のような人はたくさんいると思います。(2015-153)
V		116	農家なので米の値段がすごく安くて困ります。米もどんどん売れずに豊作でも値段が安くては全然利益が出ず、その他の経費ばかりがふくらみます。「福島米」を真心こめて作っているので変わらず食べてほしいのです。それなりに努力もしているのに…。(2015-1078)
V		116	私の家では、以前、お米を作っていましたが、原発事故後、お米が売れなくなり、農協に売っても安く、赤字の為、また、子供達にも食べさせられない為、田んぼをやめてしまいました。他でもやめてしまった家は、たくさんあります。(2016-703)

V	116	自営業をしていましたが震災あたりから経営が思わしくなくなり自営業をやめて生活が変わってしまいました。子供に対して温厚だった父親も仕事が忙しかったりつかれていたりするとからまる子供に対しておこるようになったり、私自身も働かなければという思いから自分に余裕がなくなっています。震災で娘2人と避難した時から娘を怒るようになり怒っては罪悪感で反省しあやまっていましたが今ではエスカレートしてしまう日々。同居している祖父母は小さい子供がいても原発事故をあまり重くは受け止めていません。感じ方のずれは言葉に出る事があるのでとても淋しさを感じる事があります。(2016-899)
V	116	私は仕事も辞めざるを得ない状況になり、主人の実家で暮らす選択をしましたが、幸せを感じた事はありません。原発事故・地震さえなければ…と思う事がたまにあります、仕方ない事ですよね…。子供の成長とともに、自分も成長しなければ…と思うこの頃です。(2016-307)

5 ケイパビリティの再生と共同性の回復：多様な選択を可能にする支援

原発事故から7年が過ぎた。除染などで放射線量は下がりつつある。福島県中通りのスーパーに並ぶ地元産食材を買う親子が増え、子どもたちが公園で遊ぶ姿が見られるようになった。しかし、日々の暮らしや子どもの成長を考えると、至るところに事故の影響が残っている。2016年1月の調査でも次のような声があった。

「子どもは小学生になり、体が強くなってきたと感じるが、体力がないように感じる。特に腕や脚の筋力がないのか、キャッチボールやなわとびが苦手なところが気になる。2～3歳の頃、ほとんど外で体を動かさなかったことが影響しているのでは、と心配になる。もっと運動させなくてはと不安になることがある」

「姉二人の同時期と比較して、発表会や作品などを見て、この子の世代の成長の遅れを感じる。のびのびと遊ばせてやれなかった影響かと思う」

こういった見えにくい被害が、常に不安から抜け出せない理由の一つである。また、どこか体調が悪くなると、原発事故や放射能の影響ではないかと思ってしまう、いわゆる関連付けが生じる（こうした関連付けは、被爆者や水俣病被害者などに普遍的に見られる現象である）。

では、それに対してどのような被害補償と支援策が考えられるだろうか。まず、原発事故による被害を健康被害のみに矮小化せず、生活全般に対する補償へと広げる必要がある。

原発被害の賠償をめぐる法的枠組みとしては「原子力損害の賠償に関する法律」と「中間指針」があるが、これまでの原子力損害賠償紛争審査会によるADR（裁判外紛争解決手続き）や原発損害賠償訴訟の裁判例を見ると、そこには根本的な欠陥があると言える。東京電力による原賠審の調停案を拒む事例が増えており、中間指針やそれに準拠した裁判例ではこぼれ落ちる損害がたくさんあるからである。これを考えるためには、原発被害の二つの特性、つまり時間軸と関係性の軸に着目する必要がある。

まず時間軸にまつわるものとは、現時点では顕在化していないリスクの予防ならびに回避行動の観点からの損害である。具体的には、①子どもの将来の健康不安、②将来の結婚・就職などにおけるいじめ・差別不安、③放射能に関する情報不安である。既に生じた被害だけでなく、将来生じるかもしれない被害の回避行動が現在の子どもの社会参加や活動を制約し、それが心身の健康に影響を及ぼさうという視点である。

もう一つの重要な視点である関係性の軸で見えるものは、放射能リスクをめぐる周囲との認識のずれと対処行動の違いによる人間関係の軋轢による損害である。また、原発避難者へのいじめ事件や将来の結婚・就職などにおける差別不安といったものは、福島県とそれ以外の地域との間に人間関係の分断をもたらす。

こうした将来の健康被害の予防・回避行動と関係性の喪失が、原発被害の主要な部分を占めている。これを補償していくものとして、「保養」の支援や「放射能健康被害補償法」の立法といった制度の設計が考えられる。

保養は、放射線量が低い地域に、短くて1～2日、長い場合は1カ月ほど滞在、子どもたちが自然体験や外遊びをし、心身ともにリフレッシュするための活動である。だが、もう一つの効果は、子育ての不安や悩みを抱える母親が、何でも話せる場を提供することにある。民間の「リフレッシュ

サポート」と「311 受け入れ全国協議会保養促進ワーキンググループ」が2016年7月に発表した保養実態調査報告書によると、北海道、関西、長野県、南関東を中心に全国で234以上の団体が保養の受け入れを行っており、リピーターも含めて述べ1万5千人以上がこれらの団体を利用しているという。福島県中通りの親子は長期休暇期間などに保養に出かけており、保養の機会を増やしてほしいという要望が多い。上記の「生活不安」の「除染」に関する母親の声にもあったように、子どもたちだけでも参加できる保養や自然体験などを選択できるようにすることが考えられる。2012年6月に成立した「子ども・被災者支援法」の理念では、福島県の親子が保養や避難を選択することができ、それを公的に支援することになっているが、現在、公的な補助があるのは「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」のみである。避難指示区域の解除や福島への帰還が進んでいる今だからこそ、保養のニーズは高まっており、公的に支援する制度を整備する時期にさしかかっているといえるだろう。

一方、放射能健康被害補償法のねらいはシンプルである。原発事故からこれだけの時間が経っても、中通りで子育て中の母親にこれほどまでに多い、子どもの将来の健康に対する不安に応えることだ。そのためには、原発事故や放射能に関連する体調不良または健康不安を抱える人が気軽に受診でき、健康相談を受けられる体制を制度的に確保することが必要である。もちろん、当該の都道府県と国が責任主体となる。公害によって生じた健康被害の損失を補填する、かつての公害健康被害補償法を見本として、民事責任は問わない形で設計する。そうした制度があれば、甲状腺ガンなどを含めて今後、原発事故に由来するいかなる健康への影響がおきても、公的なフォローを義務づけられることは大きい。

こうして、福島に住まう人々の多様な選択を可能にする社会の仕組みをつくっていく。その先の日常は、少しでも明るいものに変化していくのではないだろうか。

参考文献

- Erikson, K.,1994, A New Species of Trouble; The Human Experience of Modern Disasters, W·W·Norton & Company
- Bromet, E.J., 2014, Emotional consequences of nuclear power plant disasters, Health Physics.106 (2) : 206-10.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満『終わらない被災の時間——原発事故が福島県中通りの親子に与える影響』石風社、2015年
- 成元哲「石牟礼道子が遺したもの——「チェルノブイリの祈り」との共振、福島への示唆」『現代思想』2018年5月臨時増刊号
- 成元哲・牛島佳代・松谷満「1,200 Fukushima Mothers Speak: アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』第8巻第1号、2014年、91～194ページ
- 成元哲・牛島佳代・松谷満「700 Fukushima Mothers Speak:2014年アンケート調査の自由回答にみる福島県中通りの親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』第8巻第2号、2015年、1～74ページ
- 成元哲・牛島佳代・松谷満「原発災害からの生活復興（レジリエンス）とはなにか：2015年調査の自由回答欄にみる福島県中通りの親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』第10巻第2号、2014年、199～268ページ
- 成元哲・牛島佳代・松谷満「原発不安に関する考察：福島県中通りの子育て中の母親の不安の諸相とその特質」『中京大学現代社会学部紀要』第11巻第2号、2018年、71～98ページ
- 成元哲・牛島佳代・松谷満「福島原発事故から「新しい日常」への道のり：2016年調査の自由回答欄にみる福島県中通りの親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』第11巻第2号、2018年、99～170ページ
- 成元哲・牛島佳代・松谷満「持続する不安、前向きな態度：2017年調査の自由回答欄にみる福島県中通りの親子の生活と健康」『中京大学現代社会学部紀要』第11巻第2号、2018年、171～254ページ
- 成元哲「「新しい日常」への道のり——福島県在住者の多様な選択を可能にする支援策」『世界』4月号、2018年、126～134ページ
- 後藤玲子『正義の経済哲学』東洋経済新報社、2002年

後藤玲子『潜在能力アプローチ——倫理と経済』岩波書店、2017年

アマルティア = セン、大庭健・川本隆史訳『合理的な愚か者——経済学 = 倫理的探求』勁草書房、1989年

アマルティア = セン、石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社、2000年

アマルティア = セン、池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討——潜在能力と自由』岩波書店、1999年

木村真三『「放射能汚染地図」の今』講談社、2014年

Eagle, G. & D. Kaminer, 2013, Continuous Traumatic Stress: Expanding the Lexicon of Traumatic Stress, Peace and Conflict: Journal of Peace Psychology, Vol.19, No. 2; 85-99

ジェームズ = コールマン、久慈利武監訳『社会理論の基礎(上)』青木書店、2004年

潮見佳男「損害算定の考え方」、淡路剛久監修、吉村良一・下山憲治・大坂恵里・除本理史編『原発事故被害回復の法と政策』43～55ページ、日本評論社

除本理史「『ふるさとの喪失』被害とその回復措置」、淡路剛久監修、吉村良一・下山憲治・大坂恵里・除本理史編『原発事故被害回復の法と政策』88～97ページ、日本評論社

吉田文和「ケイパビリティ・アプローチに基づく原発事故の被害評価」、植田和弘編『被害・費用の包括的把握』119～139ページ、2016年

ニクラス・ルーマン、小松丈晃訳『リスクの社会学』新泉社、2014年

大竹千代子・東賢一『予防原則——人と環境の保護のための基本理念』合同出版、2005年

森島昭夫・塩野宏編『変動する日本社会と法』友斐閣、2011年

伊藤信也「男女平等とケイパビリティ・アプローチ——アマルティア・センをてがかりに」『大阪薬科大学紀要(2)』、27～37ページ、2008年

牧野廣善「自由・平等とケイパビリティ——アマルティア・センの倫理理想」『阪南論集 人文・自然科学編 42(1)』、1～15ページ、2006年

江川直子「アマルティア・センのケイパビリティ概念に関する考察(大会報告論文: 幸福・不幸と社会経済システム)」『社会・経済システム 27(0)』、99～105ページ、2006年

